鳥取県教育文化財団調査報告書　82

一般国道９号（名和淀江道路）の改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ

鳥取県西伯郡名和町

名和衣装谷遺跡
古御堂金蔵ヶ平遺跡

２００３

財団法人　鳥取県教育文化財団
国土交通省　倉吉工事事務所

鳥取県教育文化財団発掘調査報告書　82
一般国道９号（名和淀江道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ
『名和衣装谷遺跡・古御堂金蔵ヶ平遺跡』

正誤表

頁　　行および位置	誤	正
挿図目次 左段　第３図	左S=1/3, 000, 000	左S=1/30, 000, 000
挿図目次 左段　第５図	(S=1/1, 000)	(S=1/800)
挿図目次 左段　第21図	(S=1/40・S=1/4)	(S=1/20・S=1/4)
挿表目次 右段　第14表	P. 51	P. 50
P. 9　　17行目	Ⅴ層が多く混じる	Ⅳ層が多く混じる
P. 13　　8行目	土坑15基	土坑16基
P. 13　　19行目	J16区で検出した。	I12区で検出した。
P. 15　　18行目	（第15図）	（第16図）
P. 15　　19行目	薄片等の石器	剥片等の石器
P. 15　　20行目	S1は、	S1・2は、
P. 15　　20行目	S2は、	S3は、
P. 30　　１行目	24は須恵器有台杯で	24は須恵器有台皿で
P. 30　　７行目	鼓型器台脚部	鼓形器台脚部
P. 32　　１行目	42は赤色塗彩された	41は赤色塗彩された
P. 51　　第44図　左上	茶畑六段田遺跡	茶畑六反田遺跡
P. 67　　第18表 No.1 備考欄	外：条痕文	外：撚糸文
P. 69　　第22表 S1 遺構・層位欄	Ⅳ層	Ⅲ層
P. 69　　第22表 S2 遺構・層位欄	Ⅳ層	Ⅲ層

鳥取県教育文化財団調査報告書　82

一般国道９号（名和淀江道路）の改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ

鳥取県西伯郡名和町

名和衣装谷遺跡
古御堂金蔵ヶ平遺跡

２００３

財団法人　鳥取県教育文化財団
国土交通省　倉吉工事事務所

1・2号掘立柱建物完掘状況（北から）

巻頭カラー図版2

1．調査区遠景（北西から）

2．調査区遠景（南東から）

1．２号掘立柱建物柱穴８遺物出土状況（南東から）

2．３号小穴遺物出土状況（北西から）

巻頭カラー図版4

1．長門産緑釉陶器皿

2．2号掘立柱建物柱穴8出土遺物

3．3号小穴出土遺物

序

名和町は、北に日本海を望み南にそびえる秀峰大山の裾野に広がる、風光明媚な自然に恵まれた町です。また、「太平記」の舞台としても知られ、古い歴史と文化が息づく町でもあります。

さて、県内においては、現在山陰自動車道の整備が着々と進められているところですが、当財団では、国土交通省の委託を受け、この事業に関係した一般国道９号（名和淀江道路）の改築に先立つ埋蔵文化財発掘調査を行っております。

そのうち、名和衣装谷遺跡では平安時代の重要な建物の一部が、古御堂金蔵ヶ平遺跡では縄文時代早期の遺物が確認されました。いずれも、この地域の歴史を解き明かす上で重要な情報を得ることができたと考えています。

今回、こうした調査成果を報告書としてまとめることができましたが、本書が今後の調査研究や歴史教育に広く活用され、埋蔵文化財に対する理解や認識がより深まることを期待します。

本書をまとめるにあたり、国土交通省倉吉工事事務所、名和町教育委員会ならびに調査に参加いただきました地元の方々には、一方ならぬ御指導、御協力をいただきました。心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成15年3月

財団法人鳥取県教育文化財団
理事長　有田博充

序　文

一般国道９号は、京都市を起点として京都府福知山市を経由し、兵庫県から鳥取県に入り、日本海に沿って西走し、島根県益田市から中国山地を越えて山口市、下関市に至る総延長約691kmの幹線道路であり、西日本の日本海沿岸地域の産業・経済活動の大動脈として大きな役割を果たしています。

このうち国土交通省倉吉工事事務所は、東伯郡泊村から米子市（鳥取・島根県境）までの76.6kmを管轄しており、時代の要請に沿った道路整備事業を実施しているところです。

こうしたなか名和淀江道路は、西伯郡名和町から淀江町にかけての国道９号の渋滞等混雑の緩和、冬季などの交通障害等の解消、県内の安全かつ円滑な東西交通ルートの確保、また災害時の緊急輸送の代替道路確保を目的として計画された高規格幹線道路（自動車専用道路）であり、平成８年度から事業に着手しています。

このルートには、多数の「埋蔵文化財包蔵地」がありますが、鳥取県教育委員会と協議を行い、文化財保護法第57条の３の規定に基づき文化庁に通知した結果、事前に発掘調査を実施し、記録保存を行うこととなりました。

このうち平成14年度は「名和衣装谷遺跡」「古御堂金蔵ヶ平遺跡」の２遺跡について財団法人鳥取県教育文化財団と発掘調査委託契約を締結し、発掘調査が行われました。

本書はこの調査結果をまとめたものです。この貴重な「記録」が文化財に対する認識と理解を深め、広く活用されることを願うと同時に、国土交通省の道路事業が文化財保護に深い関心を持ち、記録保存に努力していることを御理解いただければ幸いに存じます。

おわりに、事前の協議をはじめ、現地での調査から報告書の編集に至るまでご尽力いただいた鳥取県教育委員会及び財団法人鳥取県教育文化財団の関係各位に対し、心から感謝申し上げます。

平成15年3月

国土交通省　倉吉工事事務所長
矢　田　光　夫

例　言

1．本報告書は、平成14（2002）年度に調査した一般国道９号（名和淀江道路）の改築に伴う名和衣装谷遺跡、古御堂金蔵ヶ平遺跡の埋蔵文化財発掘調査記録である。

2．本報告書に収載した遺跡の所在地は、以下のとおりである。
名和衣装谷遺跡　　：鳥取県西伯郡名和町大字名和字衣装谷1165－１、字小三林1131－２ほか
古御堂金蔵ヶ平遺跡：鳥取県西伯郡名和町古御堂金蔵ヶ平ル588ほか

3．本報告書は第１・２・４章を八峠興、第３章を湯川善一が執筆し、編集は湯川がおこなった。

4．今回調査された遺跡は国土座標第Ｖ系に対応し、南北方向はアルファベット、東西方向はアラビア数字で北東杭を基準とする10mグリッドを設定した。方位は座標を基にし、レベルは海抜標高（m）である。

5．本報告書に掲載した地図は、国土地理院発行の1/25,000地形図「淀江」「御来屋」「船上山」、名和町発行の1/2,500名和町地形図「No.７・８」を縮小して使用した。

6．本発掘調査にあたり、遺構について独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所の山中敏史氏に、層序については、三瓶自然館の中村唯史氏に現地に来ていただき、ご指導いただいた。また出土した石材の鑑定を大山自然公園指導員の会、遠藤勝壽氏にお願いした。そのほか、緑釉陶器および土器の胎土について、防府市教育委員会の杉原和恵氏、豊浦町教育委員会の河田聡氏、美東町教育委員会の池田善文氏に防長産の緑釉陶器の資料提供を受け、岡山理科大学の白石純氏に現地指導ならびに分析をお願いし、玉稿を賜った。記して深謝いたします。

7．名和衣装谷遺跡の調査で出土した鉄製品の鑑定と観察表の作成をたたら研究会委員の穴澤義功氏に依頼し、本文中の記載もこれに基づいている。

8．名和衣装谷遺跡および古御堂金蔵ヶ平遺跡の航空写真撮影、現地における基準点測量と方眼測量、調査前と調査後の地形測量をそれぞれ業者委託した。

9．出土遺物・図面・写真は鳥取県埋蔵文化財センターが保管している。

10．現地調査及び報告書作成にあたっては、上記の方々のほかに、多くの方々や組織に御指導・御協力をいただきました。記して感謝いたします。
尾野善裕（京都国立博物館）　辻信広（名和町教育委員会）　富長源十郎（鳥取県文化財巡視指導委員）
西尾克己、丹羽野裕（以上島根県埋蔵文化財調査センター）　根鈴輝雄（倉吉市博物館）
日紫喜勝重（野洲町教育委員会）　平尾政幸（京都市埋蔵文化財研究所）　矢野健一（立命館大学）

凡　例

1．発掘調査時における遺構名、番号は報告書作成時に変更しているものがある。新旧については本文中に対応表を掲載した。

2．遺跡の略号は次のとおりである。名和衣装谷遺跡：ＮＩＴ、古御堂金蔵ヶ平遺跡：ＫＫＮ

3．遺構の呼称は、土坑状遺構は土坑、溝状遺構は溝など、「状遺構」を省略した。遺物番号は、次のように記す。なお、遺物には遺跡名略号、グリッド名、遺構名、取り上げ番号、取り上げ年月日を明記した。
番号のみ：土器　Ｓ：石器　Ｆ：鉄製品・鉄滓

4．遺構・遺物番号はそれぞれの遺跡ごとに、挿図・挿表・遺物観察表・図版については通しの番号をつけた。また本文中、挿図中及び写真図版中の遺物番号は一致する。

5．名和衣装谷遺跡の小穴観察表についての凡例は以下のとおりである。
主は主要土色を示し、複層のものは上層を、掘り方のあるものはその上層を記す。抜は抜き取り痕の上層を、柱は柱痕の上層を記す。抜き取り痕あるいは柱痕がある小穴は柱穴としてとらえた。土色は、小山正忠・竹原秀雄『新版　標準土色帖』（日本色彩研究所　2002年）に準じており、次のようにＡ～Ｊに略して記す。
Ａ：暗褐色　Ｂ：褐色　Ｃ：にぶい黄褐色　Ｄ：黒褐色　Ｅ：にぶい褐色　Ｆ：黄褐色　Ｇ：黒灰色
Ｈ：暗灰褐色　Ｉ：褐灰色　Ｊ：黄橙色

6．土器観察表の凡例は以下のとおりである。
ａ．器　　種　縄：縄文土器（押：押型文土器　粗：粗製土器）　弥：弥生土器　土：土師器　須：須恵器
緑：緑釉陶器　須恵器・土師器で有台とつかないものは無台であることを示す。
ｂ．法　　量　口径・底径の（　）内数値は復元値を示し、器高の（　）内数値は残存高あるいは復元値を示す。
ｃ．色　　調　内外面とも同色のものは、１行で示した。
ｄ．調　　整　回転ナデ：ナデ　回転ヘラケズリ：ケズリ
ｅ．使　用　痕　摩：摩耗　煤：煤付着
ｆ．部　　位　台：高台部　口：口縁部　底：底部　体：体部　天：天井部　内：内面　外：外面
・遺物実測図の断面は、須恵器が黒塗り、緑・灰釉陶器はスクリーントーン、それ以外は白抜きとした。
・土器にみえるスクリーントーン、石製品にみえる記号は下記の通りである。
→：ケズリの方向　▒：緑釉陶器の断面　▒：赤彩範囲　▒：煤付着範囲
――：磨耗範囲　　- - -：敲打範囲

7．製鉄関連遺物については、強力磁石（TUJIMA　PUP－M）と特殊金属探知機による鉄塊の抽出と、肉眼観察による考古学的な遺物の分類を行った。資料の分類、抽出、ならびに資料観察表の作成には穴澤義功氏に依頼し、ご指導賜った。
ａ．法量は、最大長、最大幅、最大厚、重量を計測した。
ｂ．磁着度は鉄滓分類用の「標準磁石」を用いて資料の反応を１～８の数字で表記したもので、数値が大きいほど磁着度が強い。
ｃ．メタル度の基準感度は次のとおり。
△：銹化がすすむ。　　Ｌ（●）：低感度でやや大きな金属鉄が残留する。
Ｈ（○）：最高感度でごく小さな金属鉄が残留する。　　特Ｌ（☆）：低感度でＬ以上の大きな金属鉄が残留する。
Ｍ（◎）：標準感度で一般的な大きさや金属鉄を有する。

目　次

序・序文
例言・凡例
目次・挿図目次・挿表目次・図版目次
第１章　序説 ……八峠…… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査の経過 …… 1
　第３節　調査体制 …… 1
第２章　位置と環境 ……八峠…… 3
　第１節　地理的環境 …… 3
　第２節　歴史的環境 …… 3
第３章　名和衣装谷遺跡の調査 ……湯川…… 6
　第１節　調査の概要 …… 6
　　１．調査の概要 …… 6
　　２．調査の方法 …… 6
　　３．基本層序 …… 9
　第２節　縄文時代の調査 …… 13
　第３節　奈良・平安時代の調査 …… 17
　第４節　その他の遺構と遺物 …… 33
　　１．時期不明の遺構 …… 33
　　２．遺構外出土遺物 …… 36
　第５節　特論 …… 39
　　１．鉄関連遺物 ……湯川、穴澤…… 39
　　２．出土土器の胎土分析 ……白石…… 43
　第６節　まとめ ……湯川…… 50
　　１．遺構と遺物 …… 50
　　２．古代山陰道について …… 51
　　３．名和衣装谷遺跡の性格 …… 52
第４章　古御堂金蔵ヶ平遺跡の調査 ……八峠…… 53
　第１節　調査の概要 …… 53
　　１．調査の概要 …… 53
　　２．調査の方法 …… 53
　　３．基本層序 …… 56
　第２節　第２遺構検出面の調査 …… 57
　第３節　第１遺構検出面の調査 …… 61
　第４節　包含層出土遺物 …… 62
　第５節　大山山麓の押型文土器について …… 62
出土遺物観察表 ……八峠、湯川…… 67
図版
報告書抄録

挿図目次

第１図　名和衣装谷遺跡の位置（S＝1/10,000）‥2
第２図　古御堂金蔵ヶ平遺跡の位置
（S＝1/10,000）‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥2
第３図　調査遺跡の位置（左S＝1/3,000,000）
（右S＝1/2,000,000）‥3
第４図　周辺の遺跡（S＝1/50,000）‥‥‥‥‥‥5

名和衣装谷遺跡

第５図　グリッドおよび全遺構配置図
（S＝1/1,000）‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥6
第６図　調査前地形測量図（S＝1/800）‥‥‥‥7
第７図　調査後地形測量図（S＝1/800）‥‥‥‥7
第８図　調査区内土層断面図（1）（S＝1/80）‥9
第９図　調査区内土層断面図（2）（S＝1/80）‥10
第10図　調査区内土層断面図（3）（S＝1/80）‥11
第11図　層序模式図
（S＝1/80・S＝1/800・S＝1/1600）‥12
第12図　縄文時代遺構分布図（S＝1/800）‥‥13
第13図　1～4号土坑（S＝1/40）‥‥‥‥‥‥14
第14図　5～8号土坑および1・2号小穴
（S＝1/40）‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥15
第15図　9～15号土坑（S＝1/40）‥‥‥‥‥16
第16図　縄文時代遺物包含層（Ⅲ層）
出土遺物（S＝1/4・S＝1/2）‥‥‥16
第17図　平安時代遺構分布図(1)(S＝1/400）‥18
第18図　平安時代遺構分布図(2)(S＝1/400）‥19
第19図　1号掘立柱建物（S＝1/80）‥‥‥‥‥20
第20図　2号掘立柱建物および出土遺物（1）
（S＝1/80・S＝1/4）‥‥‥‥‥‥‥21
第21図　2号掘立柱建物および出土遺物（2）
（S＝1/40・S＝1/4）‥‥‥‥‥‥‥22
第22図　17～21号土坑および出土遺物
（S＝1/40・S＝1/4・S＝1/3）‥‥23
第23図　22～26号土坑および出土遺物
（S＝1/40・S＝1/4）‥‥‥‥‥‥‥24
第24図　1・2号溝および出土遺物
（S＝1/80・S＝1/4）‥‥‥‥‥‥‥25
第25図　調査区南部遺構群（1）および出土遺物
（S＝1/160・S＝1/80・S＝1/4）‥26
第26図　調査区南部遺構群（2）（S＝1/160）‥27
第27図　3～8号小穴および出土遺物
（S＝1/40・S＝1/4）‥‥‥‥‥‥‥28
第28図　平安時代遺物包含層（Ⅱ層）
出土遺物（1）（S＝1/4）‥‥‥‥‥‥30
第29図　平安時代遺物包含層（Ⅱ層）
出土遺物（2）（S＝1/4）‥‥‥‥‥‥31
第30図　平安時代遺物包含層（Ⅱ層）
出土遺物（3）（S＝1/4・S＝1/3）‥32
第31図　近世遺構分布図（S＝1/800）‥‥‥‥33
第32図　28～30号土坑・4号溝および出土遺物
（S＝1/300・S＝1/80・S＝1/4・S＝1/3）‥34
第33図　1～3号柵列（S＝1/80）‥‥‥‥‥‥35
第34図　遺構外出土遺物（1）（S＝1/4）‥‥‥37
第35図　遺構外出土遺物（2）
（S＝1/4・S＝1/3・S＝1/2）‥‥‥38
第36図　名和衣装谷遺跡鉄関連遺物構成図
（S＝1/4）‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥41
第37図　名和衣装谷遺跡内での胎土比較
（K－Ｃａ散布図）‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥47
第38図　名和衣装谷遺跡と古市宮ノ谷山遺跡との
比較（K－Ｃａ散布図）‥‥‥‥‥‥‥‥47
第39図　岡山県窪木遺跡2出土緑釉陶器の産地
分布図（K－Ｔｉ散布図）‥‥‥‥‥‥‥48
第40図　周防国府跡出土緑釉陶器ほかの生産地
比較（K－Ｔｉ散布図）‥‥‥‥‥‥‥‥48
第41図　平原Ⅱ遺跡、川棚条里遺跡出土緑釉陶器
ほかの生産地比較（K－Ｔｉ散布図）‥‥49
第42図　名和衣装谷遺跡出土緑釉陶器の生産地
推定（K－Ｔｉ散布図）‥‥‥‥‥‥‥‥49
第43図　鳥取県内の緑釉陶器出土遺跡および周辺主要駅路
（S＝1/500万・S＝1/150万）‥‥‥‥50
第44図　古代山陰道推定ルート
（S＝1/50,000）‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥51

古御堂金蔵ヶ平遺跡

第45図　調査前地形測量図（S＝1/500）……53
第46図　調査区内土層断面図（1）（S＝1/80）‥54
第47図　第2遺構検出面遺構分布図（S＝1/300）‥54
第48図　調査区内土層断面図（2）（S＝1/80）‥55
第49図　第1遺構検出面遺構分布図
（S＝1/300）……55
第50図　調査区内土層断面図（3）（S＝1/80）‥56
第51図　調査区内土層断面図（4）（S＝1/80）‥57
第52図　1・2号土坑（S＝1/40）……58
第53図　2号小穴および出土遺物
（S＝1/10・S＝1/3・S＝1/2）‥‥58
第54図　土坑・小穴分布図（S＝1/80）……59
第55図　包含層遺物出土図（S＝1/200）……60
第56図　1号溝（S＝1/40）……61
第57図　包含層出土遺物（1）
（S＝1/3・S＝1/1）……63
第58図　包含層出土遺物（2）
（S＝1/3・S＝1/2）……64
第59図　大山山麓の押型文土器出土遺跡
（S＝1/300,000）……65

挿表目次

第1表　周辺遺跡一覧表……4

名和衣装谷遺跡

第2表　新旧遺構対応表……8
第3表　小穴観察表（1）……29
第4表　小穴観察表（2）……36
第5表　鉄関連遺物分析資料観察表　資料番号1‥39
第6表　鉄関連遺物分析資料観察表　資料番号2‥39
第7表　鉄関連遺物分析資料観察表　資料番号3‥40
第8表　鉄関連遺物分析資料観察表　資料番号4‥40
第9表　鉄関連遺物分析資料観察表　資料番号5‥41
第10表　鉄滓表……42
第11表　名和衣装谷遺跡出土土器の
胎土分析一覧表……45
第12表　周防国府跡、平原Ⅱ遺跡、川棚条里跡
出土土器の胎土分析一覧表（1）……45
第13表　周防国府跡、平原Ⅱ遺跡、川棚条里跡
出土土器の胎土分析一覧表（2）……46
第14表　鳥取県内の緑釉陶器出土遺跡……51

古御堂金蔵ヶ平遺跡

第15表　小穴観察表……59
第16表　包含層遺物一覧表……61
第17表　大山山麓の押型文土器出土遺跡……66

観察表

第18表　名和衣装谷遺跡出土土器観察表（1）‥‥67
第19表　名和衣装谷遺跡出土土器観察表（2）‥‥68
第20表　名和衣装谷遺跡出土土器観察表（3）‥‥69
第21表　名和衣装谷遺跡出土土製品観察表……69
第22表　名和衣装谷遺跡出土石製品観察表……69
第23表　古御堂金蔵ヶ平遺跡出土土器観察表‥‥70
第24表　古御堂金蔵ヶ平遺跡出土石器観察表‥‥70
第25表　古御堂金蔵ヶ平遺跡出土鉄器観察表‥‥70

図版目次

巻頭カラー図版1　1・2号掘立柱建物
完掘状況（北から）
巻頭カラー図版2　1.調査区遠景（北西から）
2.調査区遠景（南西から）
巻頭カラー図版3　1.2号掘立柱建物柱穴8
遺物出土状況（南から）
2.3号小穴遺物出土状況
（北西から）
巻頭カラー図版4　1.長門産緑釉陶器皿
2.2号掘立柱建物出土遺物
3.3号小穴出土遺物

名和衣装谷遺跡

図版１　1．調査地の周辺（北西から）
　　2．調査区遠景（北西から）
図版２　1．調査区近景（北西から）
　　2．最終遺構確認面完掘状況（北西から）
図版３　1．1号土坑完掘状況（北東から）
　　2．2号土坑完掘状況（北西から）
　　3．4号土坑完掘状況（西から）
図版４　1．第2遺構面完掘状況（南から）
　　2．1・2号掘立柱建物完掘状況（北から）
図版５　1．1・2号掘立柱建物完掘状況（垂直）
　　2．1号掘立柱建物柱穴2土層断面（南から）
　　3．2号掘立柱建物柱穴1土層断面（北東から）
　　4．2号掘立柱建物柱穴8遺物出土状況（南東から）
　　5．2号掘立柱建物柱穴15遺物出土状況（北から）
図版６　1．19号土坑遺物出土状況（北から）
　　2．1・2号溝、23号土坑完掘状況（南東から）
　　3．3号溝完掘状況（北西から）
図版７　1．4号小穴遺物出土状況（南東から）
　　2．6号小穴遺物出土状況（北から）
　　3．7号小穴遺物出土状況（南東から）
　　4．8号小穴土層断面（西から）
　　5．硬化面検出状況（北東から）
図版８　1．第1遺構面完掘状況（北東から）
　　2．4号溝完掘状況（北西から）
　　3．4号溝遺物出土状況（北西から）
図版９　1．1・2号柵列完掘状況（北東から）
　　2．28号土坑遺物出土状況（南から）
　　3．29号土坑遺物出土状況（南東から）
　　4．30号土坑土層断面（北東から）
　　5．31号土坑完掘状況（南西から）
　　6．道路状遺構検出状況（南東から）
図版10　1．Ⅱ・Ⅲ層出土縄文土器
　　2．2号掘立柱建物出土土器
　　3．4拡大写真
　　4．5拡大写真
図版11　1．平安時代遺構出土土器
　　2．3号小穴出土土器
　　3．Ⅱ層出土供膳具（8世紀～9世紀前半）
図版12　1．Ⅱ層出土供膳具（9世紀前半）
　　2．Ⅱ層出土緑釉陶器皿
図版13　1．Ⅱ層出土土師器貯蔵具
　　2．Ⅱ層出土須恵器貯蔵具
　　3．Ⅱ層出土土製品
図版14　1．遺構・包含層外出土供膳具（8世紀～9世紀前半）
　　2．遺構・包含層外出土供膳具（9世紀後半）
　　3．遺構・包含層外出土貯蔵具1
　　4．遺構・包含層外出土貯蔵具2
図版15　1．Ⅱ層出土石製品
　　2．遺構・包含層外出土石製品
図版16　1．鉄滓・鉄製品

古御堂金蔵ヶ平遺跡

図版17　1．調査区遠景（西から）
　　2．調査区遠景（北から）
図版18　1．第2遺構検出面完掘状況（北から）
　　2．遺物（17ほか）出土状況（南東から）
　　3．遺物（4～9・11,S10･14）出土状況（南東から）
図版19　1．土坑・小穴完掘状況（南東から）
　　2．遺物（S4）出土状況（東から）
　　3．1・2号土坑、小穴完掘状況（西から）
図版20　1．土坑1、小穴完掘状況（南東から）
　　2．2号小穴遺物出土状況（北から）
　　3．1号溝完掘状況（北西から）
図版21　1．1号土坑、小穴検出状況（南東から）
　　2．出土遺物（1～22,F1）
図版22　1．F1のX線写真
　　2．出土遺物（S1・S3・S4・S17）
　　3．出土遺物（S5～16）

第１章　序説

第１節　調査に至る経緯

本発掘調査は、一般国道９号（名和淀江道路）の改築工事を原因とし、名和町大字名和字衣装谷・字小三林に所在する名和衣装谷遺跡と、名和町大字古御堂字金蔵ヶ平に所在する古御堂金蔵ヶ平遺跡についての埋蔵文化財発掘調査における記録保存を目的としている。当該地の工事予定地周辺は、これまで周知の遺跡としての登録はないが、工事に先立つ踏査により埋蔵文化財の存在が予察できた。そのため、名和町教育委員会は鳥取県教育委員会文化課との協議により試掘調査を実施することとした。その結果、名和衣装谷遺跡においては平安時代の遺物が、古御堂金蔵ヶ平遺跡では古墳時代の遺物や遺構が確認され、遺跡の存在が明らかになった。

その結果を受け、原因者である国土交通省倉吉工事事務所は、鳥取県教育委員会文化課と協議を行い、遺跡の現状での保存は困難であるため、事前に発掘調査を行い、記録保存を行うことを決し、文化財保護法第57条の3の規定に基づき鳥取県教育庁に通知した。その上で国土交通省倉吉工事事務所は、発掘調査を財団法人鳥取県教育文化財団に委託し、西部埋蔵文化財名和調査事務所が調査を担当することになった。そこで、財団法人鳥取県教育文化財団埋蔵文化財センター所長から文化庁長官に文化財保護法57条1項に基づく発掘届けを提出し、調査を行うこととした。

第２節　調査の経過

名和衣装谷遺跡　名和衣装谷遺跡は、大山より続く丘陵上にあり、名和町大字名和字衣装谷・字小三林に所在する。

調査に先立ち、調査前の状況を記録するため航空撮影および地形測量を行った。その上で表土除去を兼ね、遺構の密度および遺構面をより正確に把握するため、4月22日からトレンチ調査を実施した。その結果、遺構の遺存は良くないものの近世と平安時代の遺構が存在すること、部分的に遺物包含層も存在することが明らかになった。調査区は国土座標第Ⅴ系（日本測地系）に従い、10ｍ四方を方眼とし、南北軸をアルファベット、東西軸をアラビア数字で表し、北東隅をグリッド名とした。

近世の主な遺構は土坑、溝である。

平安時代の遺構は、大型の掘立柱建物2棟、土坑、小穴などがある。そのほか、作業場所とみられる硬化面、これらの施設の区画とみられる溝などがある。遺物は緑釉陶器や灰釉陶器、転用硯のほか、須恵器、土師器などが出土した。

縄文時代の遺物包含層からは縄文時代中期の土器、黒曜石の石鏃や剥片、その他石錘などが出土した。遺構としては土坑がある。

9月14日には現地において説明会を開催し、地元の方々を中心に約70名の参加があった。

古御堂金蔵ヶ平遺跡　北西に張り出す丘陵の先端部に位置しており、名和町大字古御堂字金蔵ヶ平に所在する。

調査は平成14年9月から11月まで行った。その結果、古墳時代以降の遺構、縄文時代から古墳時代の遺物包含層、弥生時代以前の遺構を確認した。古墳時代以降の遺構は溝を確認した。時期を特定できるような遺物は出土していない。

縄文から古墳時代の遺物包含層では、縄文時代早期の押型文土器、弥生時代後期の土器、古墳時代では前期から中期の土器が出土しており、縄文時代から弥生時代の石鏃や石斧などが出土した。谷を挟み丘陵の西隣に位置する古御堂笹尾山遺跡では弥生時代後期と古墳時代前期から後期までの住居跡が検出されている。

現地説明会は開催しなかったが、11月10日に行われた名和乙ヶ谷遺跡の現地説明会の際に資料を配布し、遺物の展示および説明を行った。

第３節　調査体制

○調査主体　　**財団法人鳥取県教育文化財団**

理　事　長	有田 博充
常 務 理 事	川口 一彦（鳥取県教育委員会事務局次長）
事 務 局 長	下田 弘人

埋蔵文化財センター

所　　長		田中 弘道（鳥取県埋蔵文化財センター所長）
次　　長		竹内　茂
次　　長		加藤 隆昭
調査研究課	課長（兼）	加藤 隆昭
企画調整班	班長	松田　潔（８月異動）
	文化財主事	原田 雅弘
庶務課	課長（兼）	竹内　茂
	主任事務職員	矢部 美恵
	事務職員	中島 いずみ

○調査担当　第２調査班　西部埋蔵文化財名和調査事務所

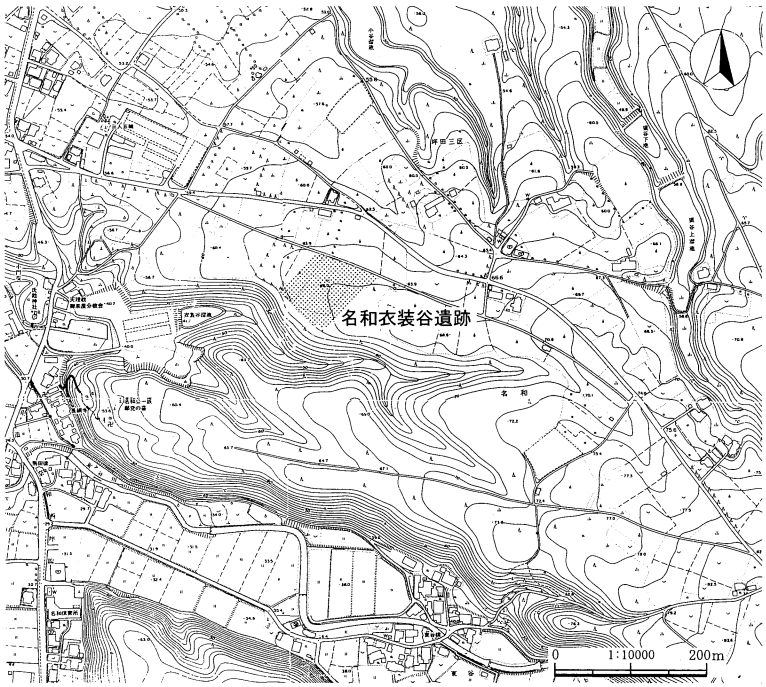
所　　長	西村 成徳
班　　長	八峠　興
主任調査員	八峠　興
調　査　員	湯川 善一
調査補助員	三木 雅子
事務補助員	金田 かおる

○調査指導　鳥取県教育委員会事務局文化課、鳥取県埋蔵文化財センター

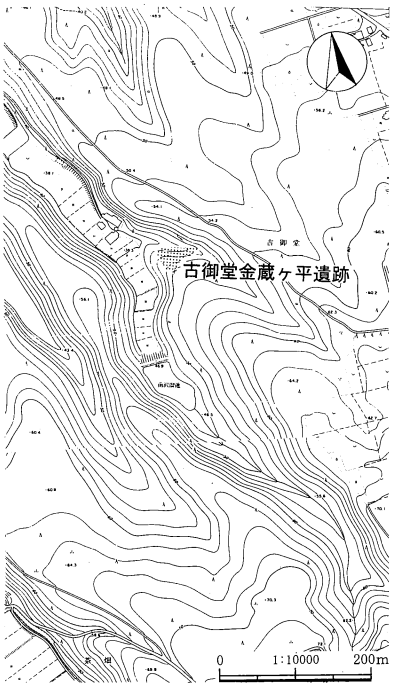
○調査協力　名和町教育委員会

下記の方々に発掘作業・整理作業をしていただいた。

石田 竹雄　井上 一夫　井上 千代子　岩村 弥生　氏 巧　門脇 千代子　川端 寿満子　木村 要　沢田 康子
塩谷 和子　島田 壽美　新開 富栄　杉原 久枝　関 八郎　高見 恵智子　高見 昌美　田鍬 孝志　田鍬 良子
田中 喜久枝　田中 輝夫　中川 房雄　中田 眞理　永見 房雄　中野 春栄　西尾 和子　西川 次雄　西村 薫子
西本 悦子　橋本 栄子　前田 恵子　前田 淑子　前田 進　前田 春繁　前田 美代子　増井 万基　増井 忠子
圓岡 實雄　圓岡 みつ江　森沢 一成　山名 佐智子　渡辺 均（五十音順）



第１図　名和衣装谷遺跡の位置



第２図　古御堂金蔵ヶ平遺跡の位置

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

鳥取県は本州の西部、中国地方の北西部に位置する。北は日本海に面し、南は標高1,200ｍを越える中国山地に隔てられており、島根県とともに山陰地方に属している。地勢は県の総面積の86.3%が山地である。

鳥取県の県域は東西約126km、南北約62km、面積は約3,507㎢である。県内は鳥取市周辺を中心とする東部地域、倉吉市周辺を中心とする中部地域、米子市・境港市周辺を中心とする西部地域に分けられる。東部に千代川と鳥取平野、中部には天神川と北条・羽合平野、西部には日野川と米子平野がある。

名和町は大山の北麓に位置し、弥山などから噴出した名和火砕流や弥山火砕流などを基盤とし、阿弥陀川が浸食を繰り返し、扇状地を形成している。

第２節　歴史的環境

旧石器時代の遺構は県内では確認されていないが、大山山麓では旧石器が発見されている。

縄文時代は草創期頃のものとされる有舌尖頭器が、東坪字陣構、門前字上大山で確認されているほか、東隣りの中山町からは字羽田井石立・退休寺原から槍先形尖頭器、松河原・殿河内から有舌尖頭器が、西隣の大山町からは荘田から木葉形有舌尖頭器が、坊領から有舌尖頭器が見つかっている。

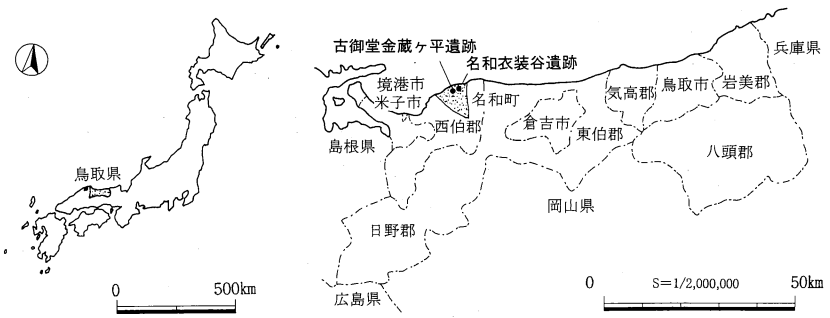
縄文時代草創期の土器は確認されていない。早期の押型文土器が名和町の茶畑六反田遺跡（15）、高田第４遺跡（24）、上大山第１遺跡（26）、蛇居谷遺跡（27）、角塚遺跡（41）のほか、今回調査を行った古御堂金蔵ヶ平遺跡で、中山町や大山町の塚田遺跡（4）などから出土している。縄文時代前期は大山町の中高遺跡、中期には今回調査が行われた名和衣装谷遺跡のほか、中山町の細工塚遺跡で土坑や遺物が確認されている。後期には名和町の古御堂遺跡（11）、南川遺跡（51）があり、南川遺跡からは石組炉をもつ住居跡と磨消縄文の土器が出土している。また時期は特定できないものの、落とし穴とみられる土坑が、坪田遺跡（47）、茶畑六反田遺跡、茶畑第１遺跡（16）、古御堂笹尾山遺跡（18）、名和乙ヶ谷遺跡（48）などで調査されている。また晩期には大塚遺跡（8）、高田第10遺跡（25）、文殊領屋敷遺跡（12）がある。

弥生時代は前期の遺跡に名和町の大塚岩田遺跡（9）があり、ここから環濠の可能性のある溝状遺構が検出されている。大山町では上野遺跡（6）で前期から古墳時代までの遺構が確認されている。

弥生時代中期になると集落はやや丘陵側でみられるようになる。名和町では茶畑山道遺跡（13）とその南隣に位置する茶畑六反田遺跡がある。茶畑山道遺跡は中期中葉～後葉段階が中心で、掘立柱建物を中心とする拠点集落とみられている。またその西側の阿弥陀川右岸の押平弘法堂遺跡（14）では中期の土壙墓９基が調査されている。大山町では新田原遺跡（5）がある。

弥生時代後期にはさらに丘陵の上側に、名和町の茶畑第１遺跡、茶畑第２遺跡（20）、東高田遺跡（21）、大山町の塚田遺跡がある。茶畑第１遺跡では大型の竪穴住居や棟持柱をもつ大型の掘立柱建物や布掘りの建物、楼閣とみられる建物などが検出されており、拠点集落の中枢部と考えられている。また大山町から淀江町にかけての妻木晩田遺跡では、400棟にのぼる竪穴住居のほか、四隅突出型墳丘墓や環濠などが検出されている。

古墳時代の遺跡は中期から後期にかけての群集墳が中心で、前期から中期の様相は不明瞭であるが、淀江町の徳楽方墳（3）



第3図　調査遺跡の位置

は方墳と考えられている。中期後半には名和町のハンボ塚古墳（52）がある。径33mの円墳で、円筒埴輪や人物形や水鳥形の形象埴輪が出土している。後期の古墳群としては、名和町では茶畑古墳群(19)、高田古墳群(22)、門前古墳群(43)、富長山村古墳群(50)、坪田古墳群(53)、豊成古墳群(58)などがある。

白鳳時代には寺院の建立がはじまる。淀江町の上淀廃寺跡では彩色壁画片が出土した。伽藍配置は３つの塔心礎が南北に並ぶ類を見ないものである。名和町内においては、高田原遺跡（23）がある。ここからは乱石積基壇や溝状遺構が検出されており、上淀廃寺と同じ形式の単弁十二葉蓮華文の軒丸瓦が出土している。

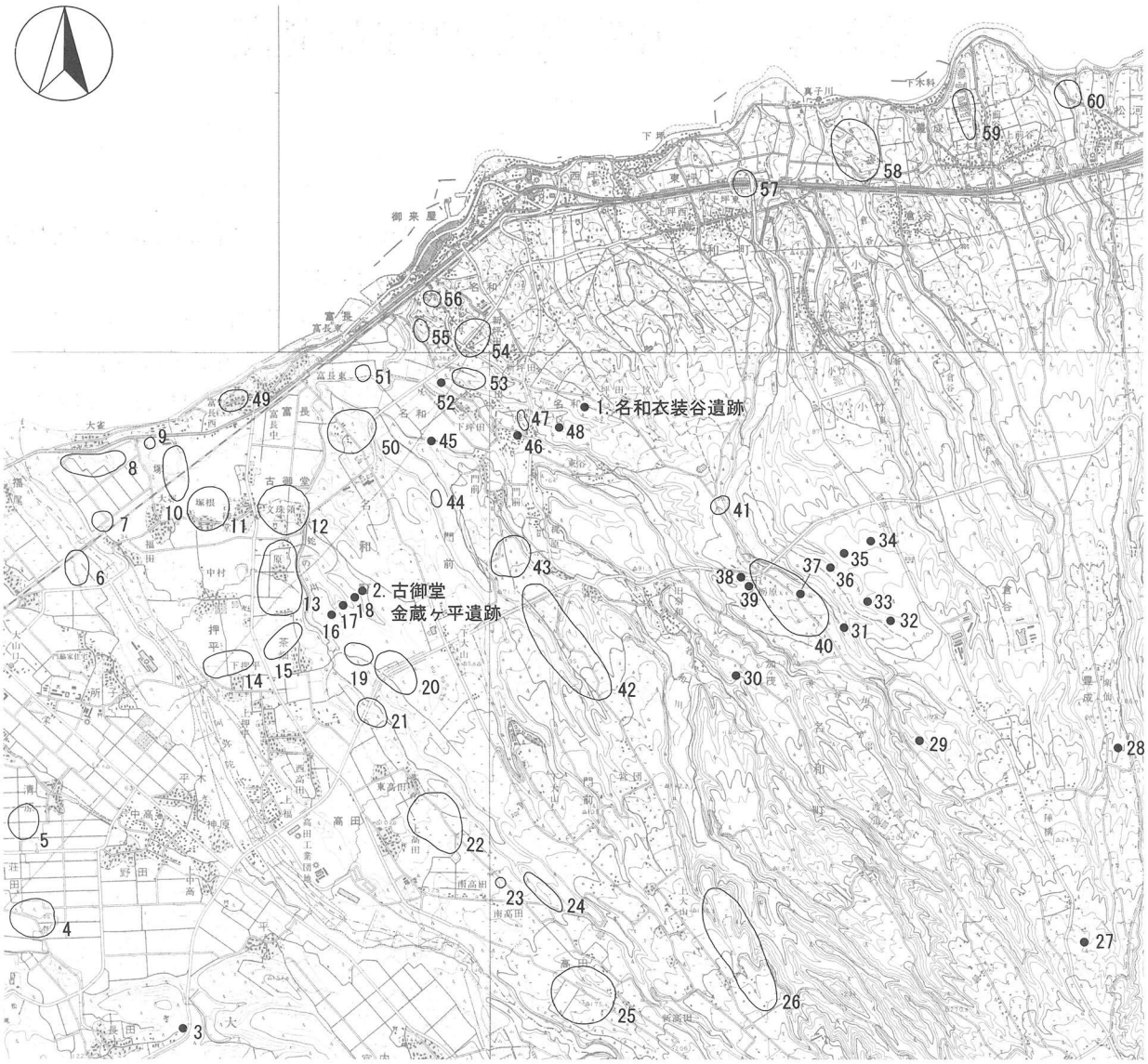
奈良時代にかけて、各地で律令制が施行され、伯耆国の国庁や山陰道の駅などが整備された。平安時代に編纂された『延喜式』の記載によると、伯耆国は六郡に分かれ、郡内には東から笏賀駅、松原駅、清水駅、和奈駅、相身駅の５駅が置かれていたとある。そのうち汗入郡には和名駅（奈和の誤記か）が置かれていたとされ、名和町名和周辺が想定されるが、その正確な位置は明らかではない。名和町の長者原遺跡（54）は郡衙推定地で、礎石抜き取り跡が調査され、付近から「財」の銅印が採集されている。また古代山陰道の具体的なルートは明らかではないが、馬郡遺跡（55）では、奈良時代の土器が出土していること、その小字名から名和駅の存在が推測される。阿弥陀川の河口近くの大塚屋敷遺跡（7）では、掘立柱建物跡15棟が検出されており、倉庫群と推測されている。生産遺跡では、栃原窯跡（39）があり、窯跡が推測されている。浜ノ坂遺跡（59）では、溝で囲まれた掘立柱建物跡と鍛冶遺構が、上寺谷遺跡（31）では製鉄炉が確認されており、周辺の遺跡（28～38）も含め鉄滓が表採されており、鉄生産の拠点的な存在であることが推測されている。

平安時代は前期の様相は不明瞭であるが、中期には名和町の茶畑六反田遺跡で緑釉陶器や墨書土器を含む条里区画とみられる溝状遺構が検出されている。主軸はほぼ北を指す。この時期は各地で条里制が整備されており、淀江平野に踏襲される条里区画は著名である。大塚塚根遺跡（10）では掘立柱建物跡が調査され、緑釉陶器が出土している。今回調査した名和衣装谷遺跡でも工房もしくは雑舎とみられる２間×５間の大型の掘立柱建物跡が２棟調査され、緑釉陶器などが出土している。西隣に位置する名和乙ヶ谷遺跡からは道路跡が見つかり、鉄滓が出土している。

鎌倉時代になると名和町では扇状地に集落がみられるようになる。茶畑六反田遺跡や西側の押平弘法堂遺跡はいずれも鎌倉時代の集落で、建物のほか屋敷墓が調査されている。ただしこれらの集落はいずれも鎌倉時代の後半には姿を消している。集落の廃絶後の時期には茶畑六反田遺跡や文殊領屋敷遺跡からは耕作痕跡が確認されており、鎌倉時代の後半に大きな集落の変動があったものとみられる。また名和公館跡伝承地（46）は、元弘３

第1表　周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	名和衣装谷遺跡	21	東高田遺跡	41	角塚遺跡
2	古御堂金蔵ヶ平遺跡	22	高田古墳群	42	門前第３遺跡
3	徳楽方墳	23	高田原遺跡	43	門前古墳群
4	塚田遺跡	24	高田第４遺跡	44	門前遺跡(散布地)
5	新田原遺跡	25	高田第10遺跡	45	門前礎石群
6	上野・上野第２遺跡	26	上大山第１遺跡	46	名和公館跡伝承地
7	大塚屋敷遺跡	27	蛇居谷遺跡	47	坪田遺跡
8	大塚遺跡	28	陣構	48	名和乙ヶ谷遺跡
9	大塚岩田遺跡	29	渡り道	49	富長城跡
10	大塚塚根遺跡	30	小倉谷(旧名和段)	50	富長山村古墳群
11	古御堂遺跡	31	上寺谷遺跡	51	南川遺跡
12	文珠領屋敷遺跡	32	田ノ免南たたら	52	ハンボ塚古墳
13	茶畑山道遺跡	33	田ノ免たたら	53	坪田古墳群
14	押平弘法堂遺跡	34	猛頭	54	長者原遺跡
15	茶畑六反田遺跡	35	円クソ谷	55	馬郡遺跡
16	茶畑第１遺跡	36	(上小下)細工塚	56	釈迦谷遺跡(散布地)
17	押平尾無遺跡	37	上寺谷入口たたら	57	龍光寺堀遺跡
18	古御堂笹尾山遺跡	38	栃原たたら	58	豊成古墳群
19	茶畑古墳群	39	栃原窯跡	59	浜ノ坂遺跡
20	茶畑第２遺跡	40	栃原遺跡	60	長野城跡



第4図　周辺の遺跡

（1333）年、隠岐島を脱出した後醍醐天皇を拝し船上山で挙兵した名和長年の居城跡とされている。このほか、海岸段丘上には富長城跡（49）や長野城跡（60）などの小規模な城跡が展開しているほか、門前にも山城の推定地がある。

中世後期以降の伯耆国では、南北朝時代の延元２（建武４）（1337）年、山名時氏が伯耆守護に、正平８（貞治２）（1363）年には因幡守護にも任じられた。守護所は倉吉市の田内城に置かれていたが打吹城に移された。大永５（1524）年に出雲の尼子径久が伯耆に進入し、打吹城を落城させた。

この時期のものとしては、名和町の門前礎石群（45）で礎石建物が検出されている。白磁・青磁・染付けなどが出土しており、中世以降の寺院跡の可能性が指摘されている。浜ノ坂遺跡では、周溝を伴う土壙墓に室町期とみられる和鏡が副葬されている。

近世、寛永９（1632）年に岡山藩主の池田光仲が鳥取藩主として国替えとなり、明治維新まで池田氏の藩政が続く。御来屋は汗入郡の中心地で、伯耆街道の宿駅で藩倉も置かれており、港としても重要な位置を占めていた。

第３章　名和衣装谷遺跡の調査

第１節　調査の概要

１．調査の概要

調査区は、大山より続く丘陵上にあり、平坦部と南西側の斜面部から構成される。2002年に名和町教育委員会による試掘調査が行われ、須恵器・土師器が多数出土したことから本調査区が設定された。

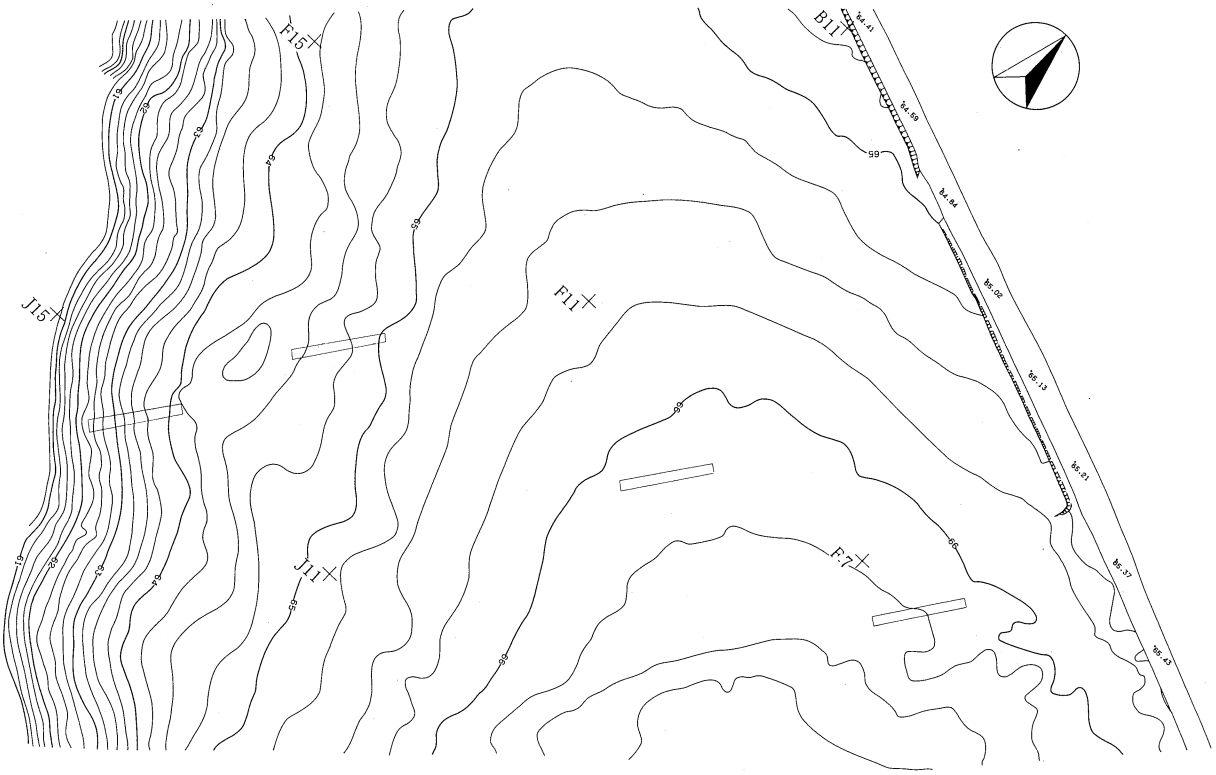
本調査は、平成14年４月に着手し、同年10月に完了した。平坦部は近・現代の耕作に伴う攪乱・削平が著しい。そのため攪乱される遺構が大半をしめ、その検出も困難な状況であった。しかし、遺存状況は良好ではないものの、合計３面の遺構面、２層の遺物包含層を確認することができた。遺物は、奈良・平安時代の土器を中心に、縄文時代中期から近世後期にかけてのものが出土している。縄文時代の遺構は、調査区南側にのみ分布しており、土坑15基、小穴２基を検出した。同時代の遺物として、縄文土器と石器が出土している。奈良・平安時代の遺構は、調査区南半を中心に、掘立柱建物２棟・土坑11基・溝３条・硬化面１面・小穴多数を確認した。同時代の遺物として、土師器・須恵器・緑釉陶器・鉄製品・鉄滓等が出土している。その他、江戸時代の土器・陶器が出土し、時期不明の土坑５基・溝１条・柵列３列・道路状遺構１条・小穴多数を検出した。

２．調査の方法

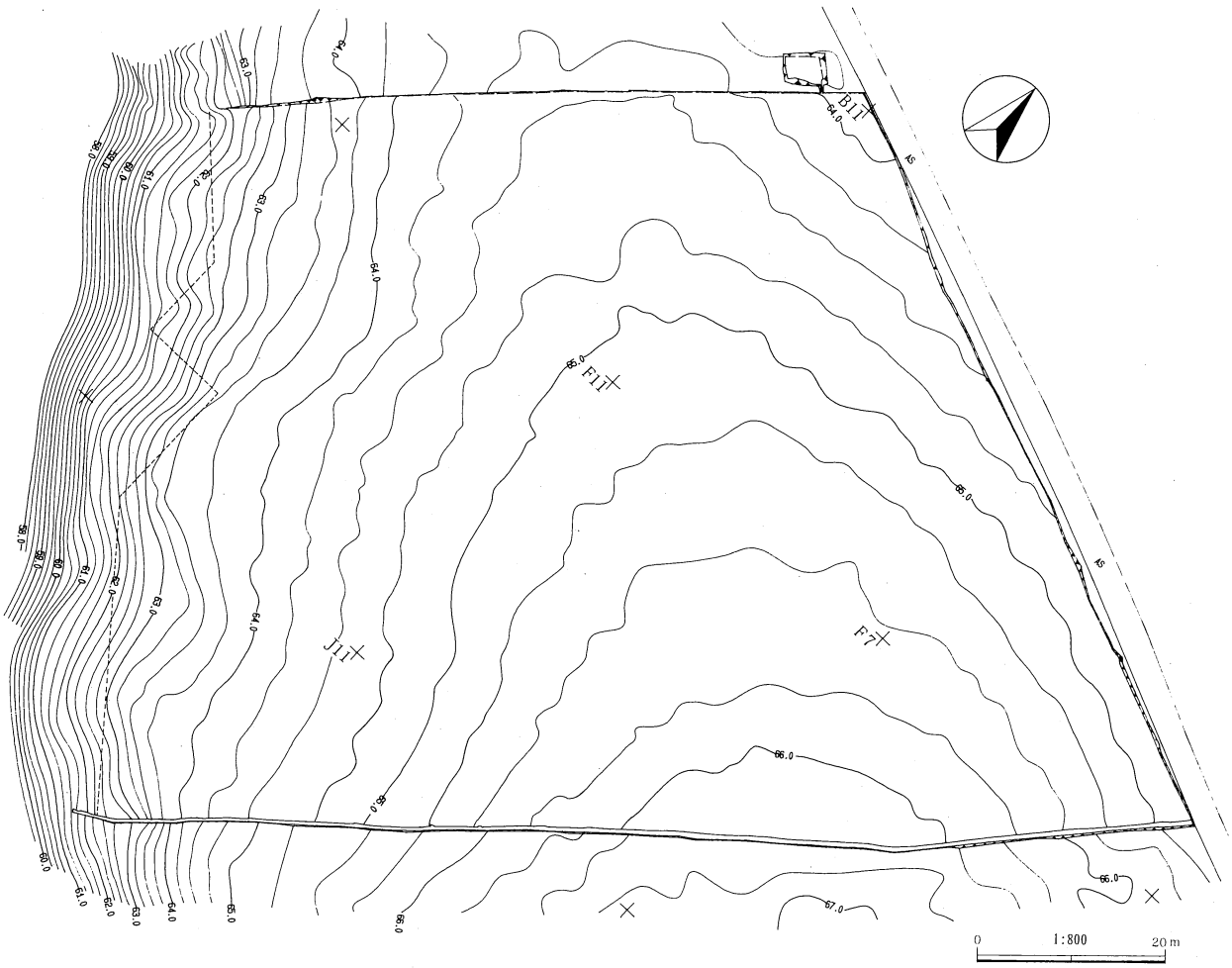
全面的な表土除去作業に入る前に、現地表面の測量を行い記録保存した。同時に、的確な表土除去を行うため、試掘トレンチを掘削し耕土下の層序を確認した。表土および耕作土の除去は、重機を使用して行った。

調査区は国土座標第Ｖ系（日本測地系）に従い、10m四方を方眼とし、南北軸をアルファベット、東西軸をア

第5図　グリッドおよび全遺構配置図



第6図　調査前地形測量図



第7図　調査後地形測量図

ラビア数字で表し、北東隅の交点名をグリッド名とした。

表土および耕作土直下には、Ⅰ～Ⅲ層、流土およびⅣ層以下の地山が広がっており、これらの上面を第１遺構面とした。第１遺構面調査完了後、遺物を極わずかにしか含まないⅠ層は重機を使用して除去し、奈良・平安時代の遺物を包含層するⅡ層は人力による掘り下げを行った。斜面部に広がる流土は、遺物を含まない１については重機による除去を行い、遺物を含む２・３は人力による堀下げを行った。この結果、ⅢおよびⅣ層以下の地山の上面で遺構面を確認し、第２遺構面とした。第２遺構面の調査においては、攪乱が激しい上、遺構覆土と攪乱の土色土質が似かよっており、遺構検出が困難であった。このため遺構の集中する区域については、攪乱土を除去後、遺構検出を行った。第２遺構面の調査完了後、縄文時代の遺物を包含するⅢ層を人力により掘り下げた。この結果、Ⅳ層以下の地山の上面で遺構面を確認し、第３遺構面とした。第３遺構面の調査と並行し、遺構面の可能性のあったⅥ層上面まで部分的に掘り下げを行った。しかし、遺構・遺物ともに存在を確認できなかったため、調査を終了した。

なお、現地における測量は、基本的に遣り方測量およびトータルステーションを用いた。写真撮影は35㎜・６×７版を基本とし、航空撮影は６×4.5版、完掘状況および遺物写真は４×５版を用いた。

第2表　新旧遺構対応表

新遺構名	旧No.	新遺構名	旧No.	新遺構名	旧No.	新遺構名	旧No.	新遺構名	旧No.	新遺構名	旧No.
１号掘立柱建物	SB３	４号小穴	P66	50号小穴	P99	96号小穴	P197	142号小穴	P232	188号小穴	P277
２号掘立柱建物	SB５	５号小穴	P79	51号小穴	P174	97号小穴	P200	143号小穴	P233	189号小穴	P278
１号土坑	SK13	６号小穴	P81	52号小穴	P100	98号小穴	P201	144号小穴	P234	190号小穴	P142
２号土坑	SK15	７号小穴	P84	53号小穴	P105	99号小穴	P60	145号小穴	P235	191号小穴	P279
３号土坑	SK16	８号小穴	P102	54号小穴	P175	100号小穴	P67	146号小穴	P236	192号小穴	P280
４号土坑	SK17	９号小穴	P130	55号小穴	P107	101号小穴	P68	147号小穴	P237	193号小穴	P281
５号土坑	SK25	10号小穴	P86	56号小穴	P108	102号小穴	P69	148号小穴	P240	194号小穴	P282
６号土坑	SK26	11号小穴	P87	57号小穴	P177	103号小穴	P70	149号小穴	P239	195号小穴	P138
７号土坑	SK27	12号小穴	P149	58号小穴	P176	104号小穴	P124	150号小穴	P238	196号小穴	P140
８号土坑	SK28	13号小穴	P88	59号小穴	P109	105号小穴	P71	151号小穴	P133	197号小穴	P139
９号土坑	SK18	14号小穴	P150	60号小穴	P112	106号小穴	P203	152号小穴	P242	198号小穴	P65
10号土坑	SK19	15号小穴	P151	61号小穴	P110	107号小穴	P204	153号小穴	P241	199号小穴	P136
11号土坑	SK23	16号小穴	P152	62号小穴	P111	108号小穴	P72	154号小穴	P243	200号小穴	P137
12号土坑	P145	17号小穴	P153	63号小穴	P113	109号小穴	P205	155号小穴	P244	201号小穴	P１
13号土坑	SK20	18号小穴	P154	64号小穴	P178	110号小穴	P206	156号小穴	P247	202号小穴	P２
14号土坑	SK21	19号小穴	P89	65号小穴	P114	111号小穴	P207	157号小穴	P248	203号小穴	P３
15号土坑	SK24	20号小穴	P90	66号小穴	P180	112号小穴	P209	158号小穴	P249	204号小穴	P４
16号土坑	SK22	21号小穴	P155	67号小穴	P181	113号小穴	P210	159号小穴	P250	205号小穴	P５
17号土坑	SK４	22号小穴	P91	68号小穴	P182	114号小穴	P211	160号小穴	P77	206号小穴	P６
18号土坑	SK６	23号小穴	P158	69号小穴	P183	115号小穴	P212	161号小穴	P74	207号小穴	P７
19号土坑	SK７	24号小穴	P159	70号小穴	P184	116号小穴	P117	162号小穴	P252	208号小穴	P12
20号土坑	SK８	25号小穴	P160	71号小穴	P128	117号小穴	P213	163号小穴	P253	209号小穴	P13
21号土坑	SK９	26号小穴	P92	72号小穴	P129	118号小穴	P116	164号小穴	P75	210号小穴	P17
22号土坑	SK10	27号小穴	P162	73号小穴	P186	119号小穴	P214	165号小穴	P76	211号小穴	P14
23号土坑	SK11	28号小穴	P163	74号小穴	P187	120号小穴	P215	166号小穴	P254	212号小穴	P16
24号土坑	SK29	29号小穴	P40	75号小穴	P103	121号小穴	P115	167号小穴	P256	213号小穴	P15
25号土坑	SK30	30号小穴	P164	76号小穴	P188	122号小穴	P216	168号小穴	P257	214号小穴	P18
26号土坑	SK31	31号小穴	P166	77号小穴	P135	123号小穴	P217	169号小穴	P258	215号小穴	P21
27号土坑	SX１	32号小穴	P165	78号小穴	P131	124号小穴	P218	170号小穴	P259	216号小穴	P20
28号土坑	SK５	33号小穴	P37	79号小穴	P273	125号小穴	P219	171号小穴	P260	217号小穴	P24
29号土坑	SK12	34号小穴	P36	80号小穴	P189	126号小穴	P118	172号小穴	P261	218号小穴	P22
30号土坑	SK14	35号小穴	P95	81号小穴	P190	127号小穴	P119	173号小穴	P262	219号小穴	P23
31号土坑	SK３	36号小穴	P167	82号小穴	P125	128号小穴	P220	174号小穴	P263	220号小穴	P19
32号土坑	SK２	37号小穴	P96	83号小穴	P191	129号小穴	P222	175号小穴	P264	221号小穴	P143
１号溝	SD３	38号小穴	P39	84号小穴	P126	130号小穴	P223	176号小穴	P265	222号小穴	P144
２号溝	SD４	39号小穴	P94	85号小穴	P192	131号小穴	P224	177号小穴	P266	223号小穴	P８
３号溝	SD５	40号小穴	P61	86号小穴	P193	132号小穴	P225	178号小穴	P267	224号小穴	P38
４号溝	SD１	41号小穴	P161	87号小穴	P127	133号小穴	P80	179号小穴	P268	225号小穴	P298
１号柵列	SA１	42号小穴	P93	88号小穴	P57	134号小穴	P226	180号小穴	P269	226号小穴	P299
２号柵列	SA２	43号小穴	P62	89号小穴	P195	135号小穴	P227	181号小穴	P270	227号小穴	P296
３号柵列	SA３	44号小穴	P63	90号小穴	P196	136号小穴	P132	182号小穴	P271	228号小穴	P85
道路状遺構	SX３	45号小穴	P64	91号小穴	P194	137号小穴	P101	183号小穴	P272	229号小穴	P68
硬化面	SX２	46号小穴	P97	92号小穴	P121	138号小穴	P228	184号小穴	P274	230号小穴	P69
１号小穴	P147	47号小穴	P172	93号小穴	P120	139号小穴	P229	185号小穴	P141	231号小穴	P134
２号小穴	P146	48号小穴	P98	94号小穴	P123	140号小穴	P230	186号小穴	P275		
３号小穴	P41	49号小穴	P173	95号小穴	P122	141号小穴	P231	187号小穴	P276		

３．基本層序

近・現代の堆積である表土・耕作土および時期不明の流土を除き、上からⅠ～Ⅺ層までを確認した。調査区は、丘陵上の平坦部と斜面部から構成されており、それぞれ堆積の状況も異なる。また、平坦部においても、後世の攪乱や削平を受け、場所により堆積の状況が異なる。Ⅳ層以下はテフラを主体とする地山である。

調査地内堆積は以下の通り。

Ⅰ層　10YR 2/2 黒褐色土（下面が第２遺構面、旧層位名：A層）

平坦部東半分を中心に広がっており、厚さは平均で15cmを測る。Ⅱ～Ⅴ層と若干の漸移層を介して接しており、これらの層が何らかの原因で削平を受けた後、堆積したものと推定される。

Ⅱ層　10YR 3/4 暗褐色土（奈良・平安時代の包含層、下面が第２遺構面、旧層位名：B層）

平坦部の西側を中心に残存する。厚さは平均で約10cmを測る。

Ⅲ層　8.75YR 5/4 にぶい黄褐色土（縄文時代の遺物包含層、下面が第３遺構面、旧層位名：Ⅰa層）

炭化物を少量含む。平坦部から斜面部にかけての傾斜変換点近くに残存する。厚さは平均で10cmを測る。

Ⅳ層　7.5YR 4/4 ～ 6 褐色土（旧層位名：Ⅰb層）

ローム層。平坦部の南側を中心に残存する。厚さは平均で約15cmを測る。

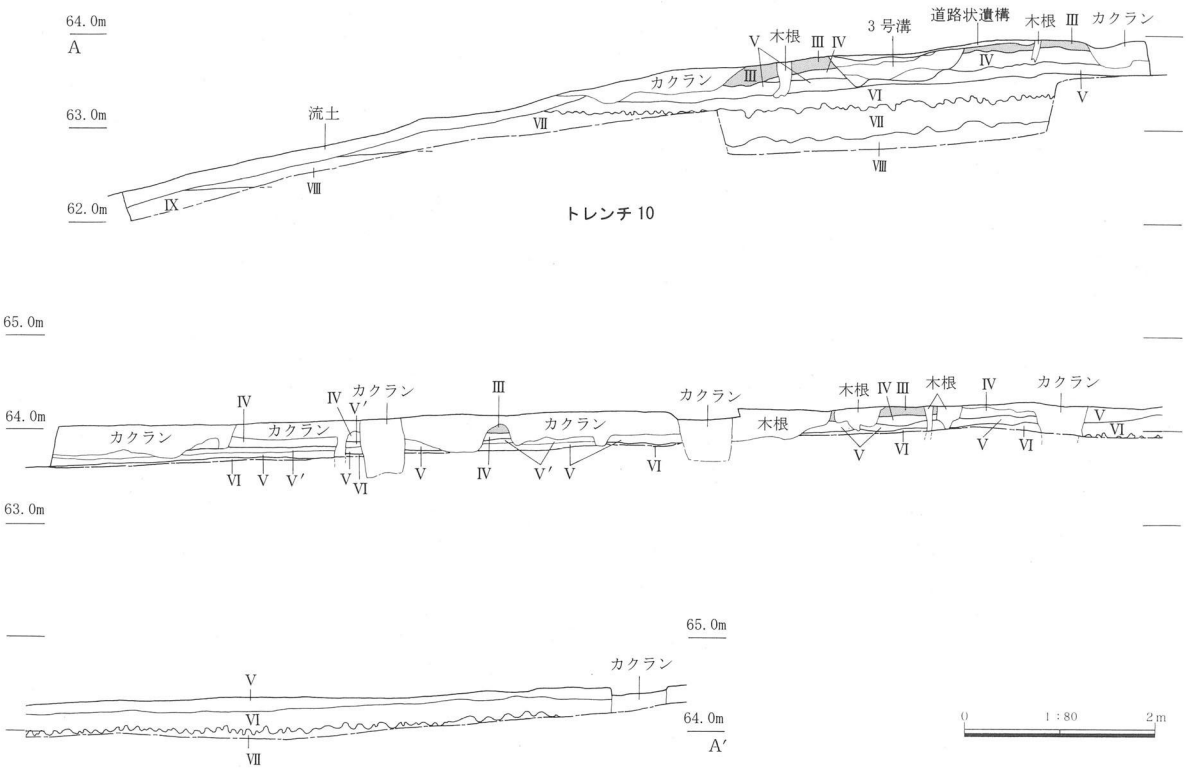
Ⅴ層　1.25Y 6/6 ～ 8 明黄褐色砂質土（AT層、旧層位名：Ⅱ層）

姶良丹沢火山灰いわゆるAT層（AT層であることは、三瓶自然館中村唯史氏のご教授による。）の残存度で上下２層に細分できる。Ⅴ層が多く混じる上層をⅤ′層（旧層位名：Ⅱ′層）、AT層が主体となる下層をⅤ層（旧層位名：Ⅱ層）とした。厚さは平均20cmを測る。

Ⅵ層と接する下面は平坦であり、Ⅵ層堆積後大きな時間差を経ずにⅤ層が堆積した可能性が高い。

Ⅵ層　8.75YR 7/4 にぶい橙色土（旧層位名：Ⅲ層）

平坦部のほぼ全面に渡って残存する。厚さは平均で約20cmを測る。



第8図　調査区内土層断面図（1）

Ⅶ層　8.75YR 5/6 明褐色粘質土（旧層位名：Ⅳ層）

しまりややなし。Ⅵ層と接する上面からクラックが多数入っており、本層上面が長期間地表面であったことを示していよう。

Ⅷ層　7.5YR 5/6 ～ 8 明褐色土（旧層位名：Ⅴ層）

風化の進んだ軽石と考えられる明黄褐色砂質土ブロックを含む。

Ⅸ層　8.75YR 4/1 褐色土（旧層位名：Ⅵ層）

安山岩礫を少量含む。

Ⅹ層　10YR 6/4 にぶい黄橙色土（旧層位名：Ⅶ層）

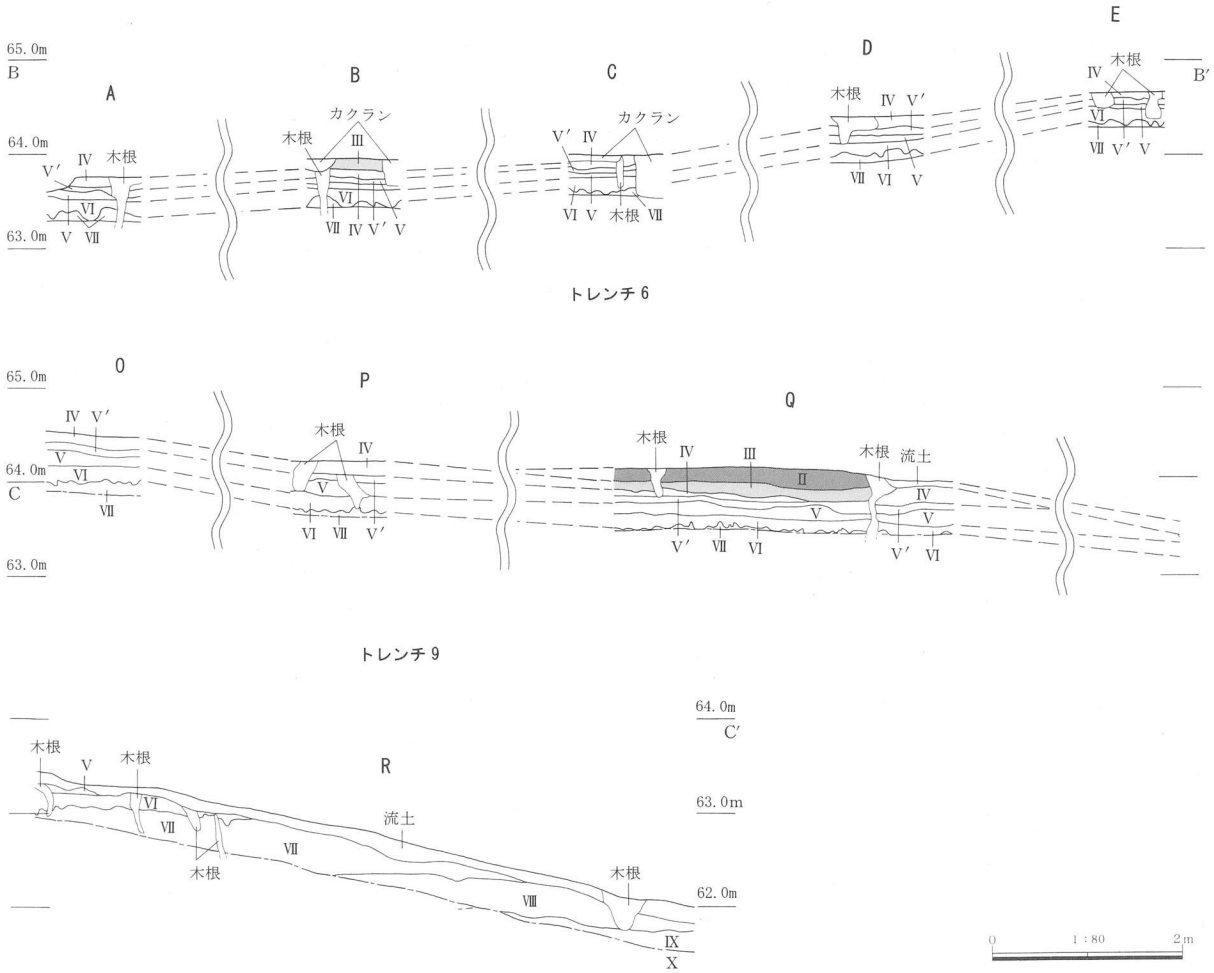
しまりあり、安山岩を多く含む。

Ⅺ層　7.5YR 5/4 にぶい褐色土（旧層位名：Ⅷ層）

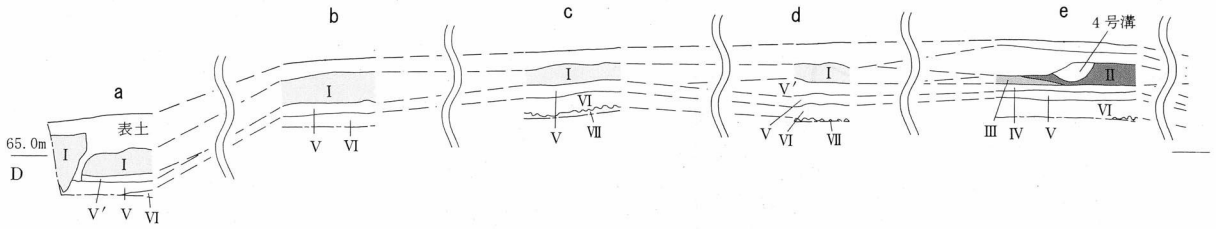
軽石を含む。

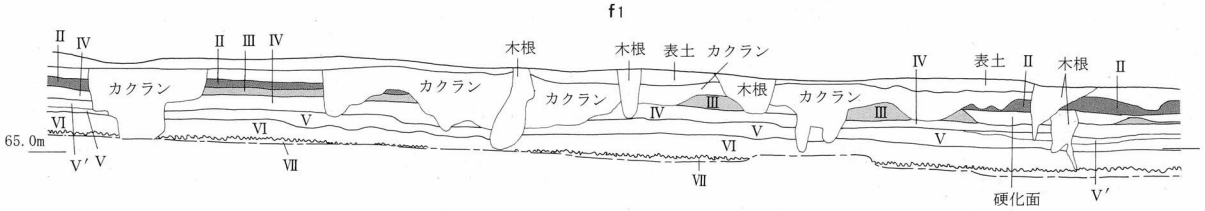
Ⅰ層はⅡ～Ⅴ層と若干の漸移層を介して接しており、これらの層が何らかの原因で削平を受けた後、堆積したものと推定される。Ⅱ層以下は、平坦部北東側を中心として大きく削平されていた。その上にⅠ層が堆積しているため、Ⅱ層形成以後Ⅰ層堆積までの間に削平されたことがわかる。削平の範囲が丘陵の稜線上より北東に限られていることから、近くに自然河道があり、その作用で削平された可能性を指摘しておきたい。

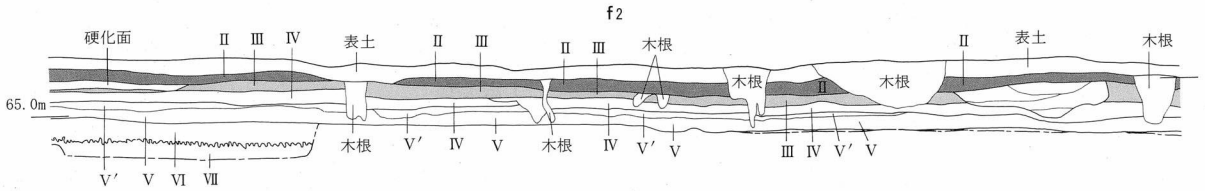
この他、斜面部にはⅡ層以下を切って流土が堆積しているのを確認した。

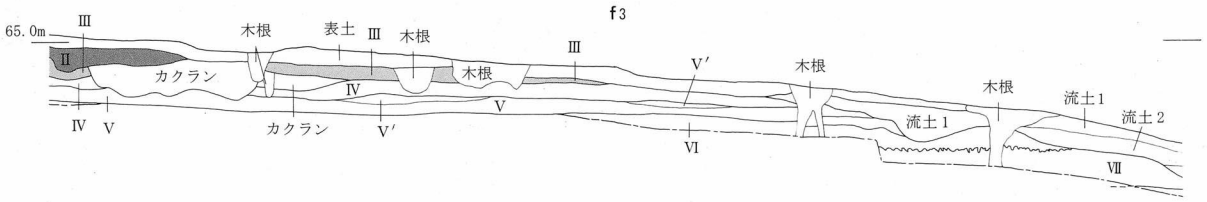


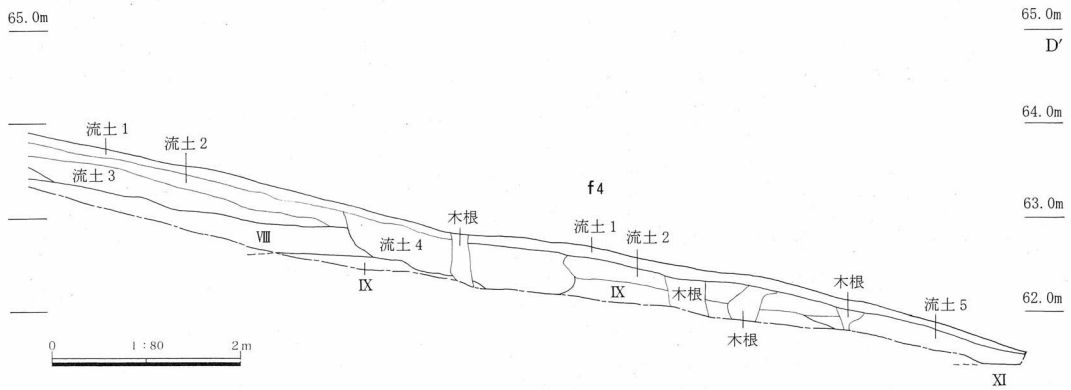
第9図　調査区内土層断面図（2）



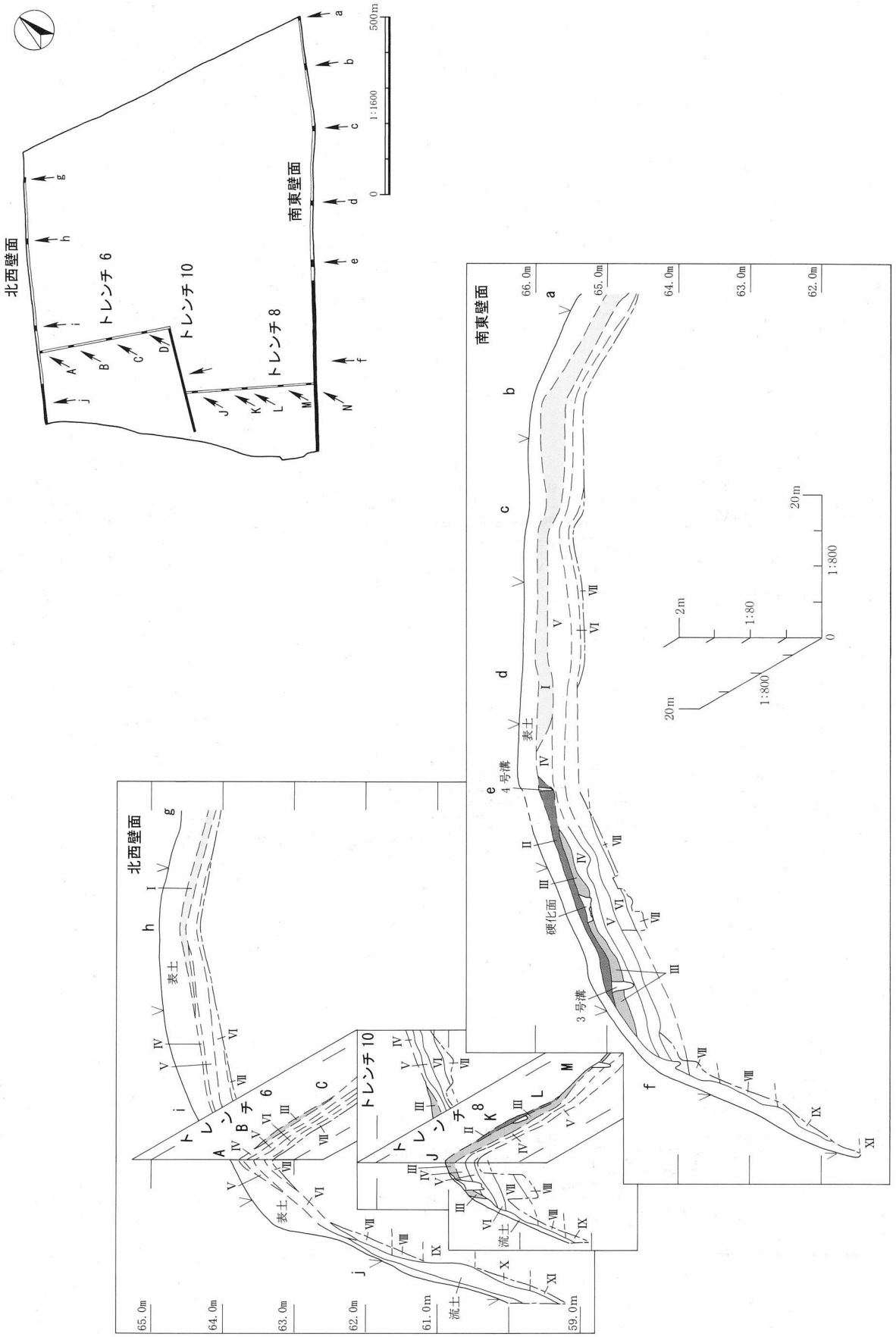








第10図　調査区内土層断面図（3）


北西壁面
南東壁面
トレンチ 6
トレンチ 10
トレンチ 8
1:1600
500m
0
表土
流土
硬化面
3 号溝
4 号溝
1:800
1:80
20m
2m
66.0m
65.0m
64.0m
63.0m
62.0m
61.0m
59.0m

第11図　層序模式図

第２節　縄文時代の成果

調査の概要

調査区南側、傾斜変換点付近に縄文時代の遺物包含層であるⅢ層が広がっていた。この層中から縄文土器をはじめ、石錘や石鏃など石器が出土している。この層の除去後、直下に遺構面を確認し第３遺構面とした。この面で検出した遺構から、遺物は出土していない。しかし、この面はⅢ層に覆われており、Ⅲ層中からは縄文中期の土器が出土している。また、調査区内において当該期以降、７世紀中葉までの出土遺物は存在しない。これらのことから第３遺構面において検出した遺構は、縄文時代中期のものと考える。

この面において、土坑15基と小穴２基を検出した。貯蔵穴の可能性がある土坑も含まれており、Ⅲ層中からは、磨石等も出土しているため、生活の場が付近に存在した可能性がある。調査面積は約1240㎡である。

1号土坑（第13図、図版３－１）

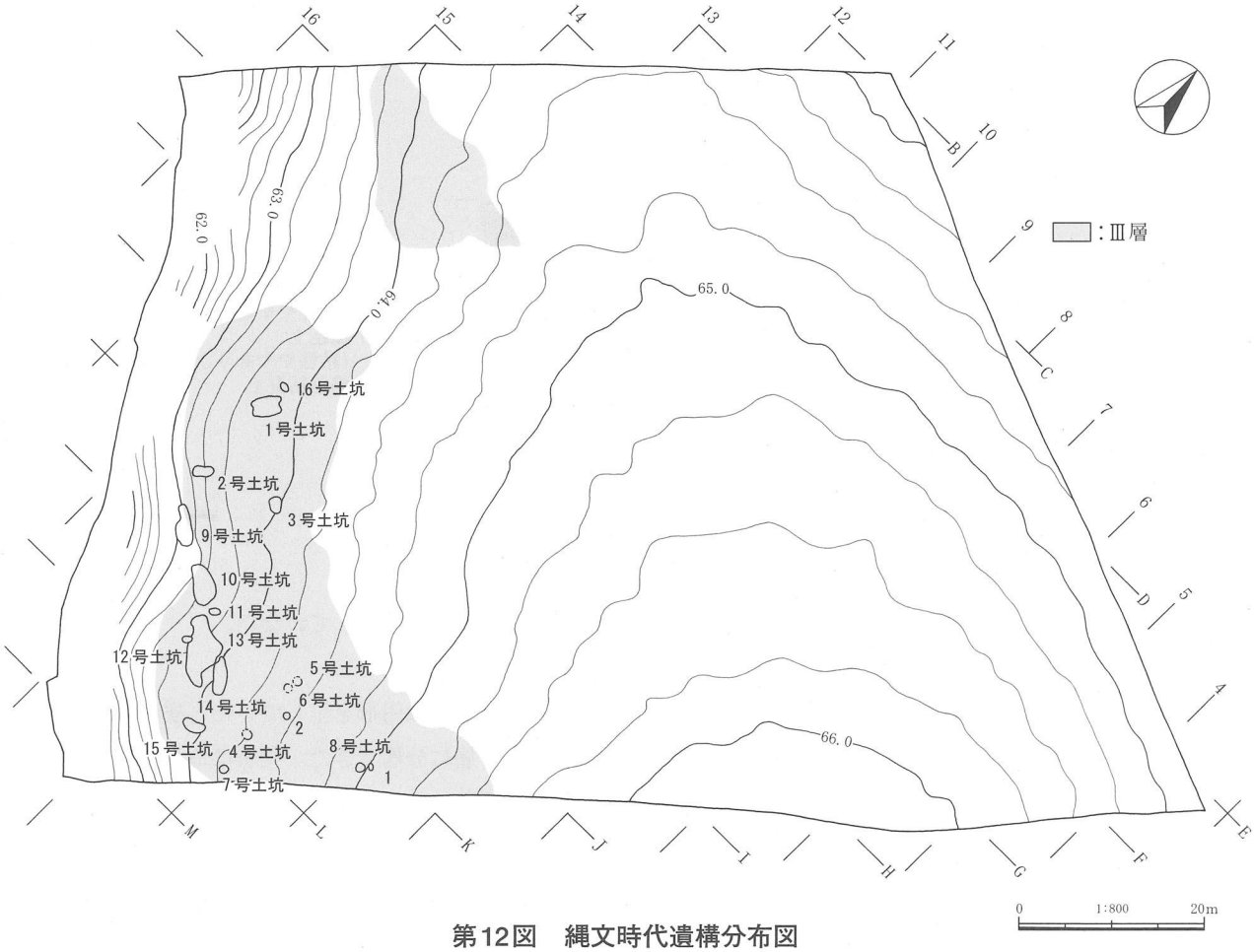
I13区で検出した。平面形態は不整方形を呈する。長軸約325㎝、短軸約226㎝、深さ約45㎝を測る。覆土は、５層に分層でき、①～④層と⑤層に大別できる。⑤層は西半にのみ堆積しており、平面形態においても東西で２つの遺構が切りあっている可能性がある。しかし、底面において明確な段差等は確認できなかった。また、覆土の土質が近似しており、１つの遺構と考え調査を行った。遺物は出土していない。

2号土坑（第13図、図版３－２）

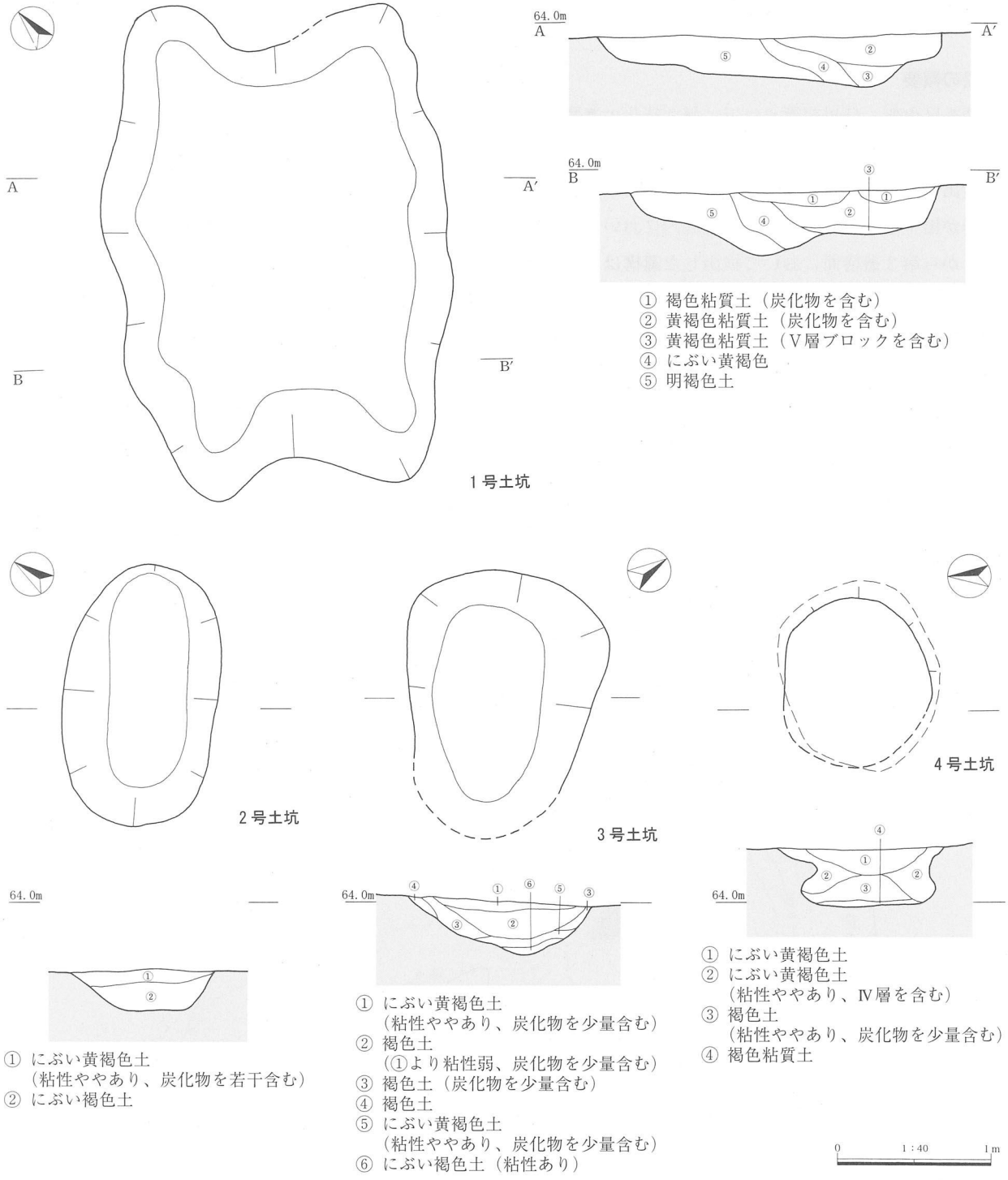
J13区で検出した。平面形態は楕円形、断面形態は丸みを持った逆台形を呈する。長軸約172㎝、短軸約101㎝、深さ約29㎝を測る。覆土は上下２層に分層できた。遺物は出土していない。

3号土坑（第13図）

J16区で検出した。平面形態は不整楕円形を呈し、断面形態は弧を描く。短軸約132㎝、深さ約42㎝を測る。覆



第12図　縄文時代遺構分布図



第13図　1～4号土坑

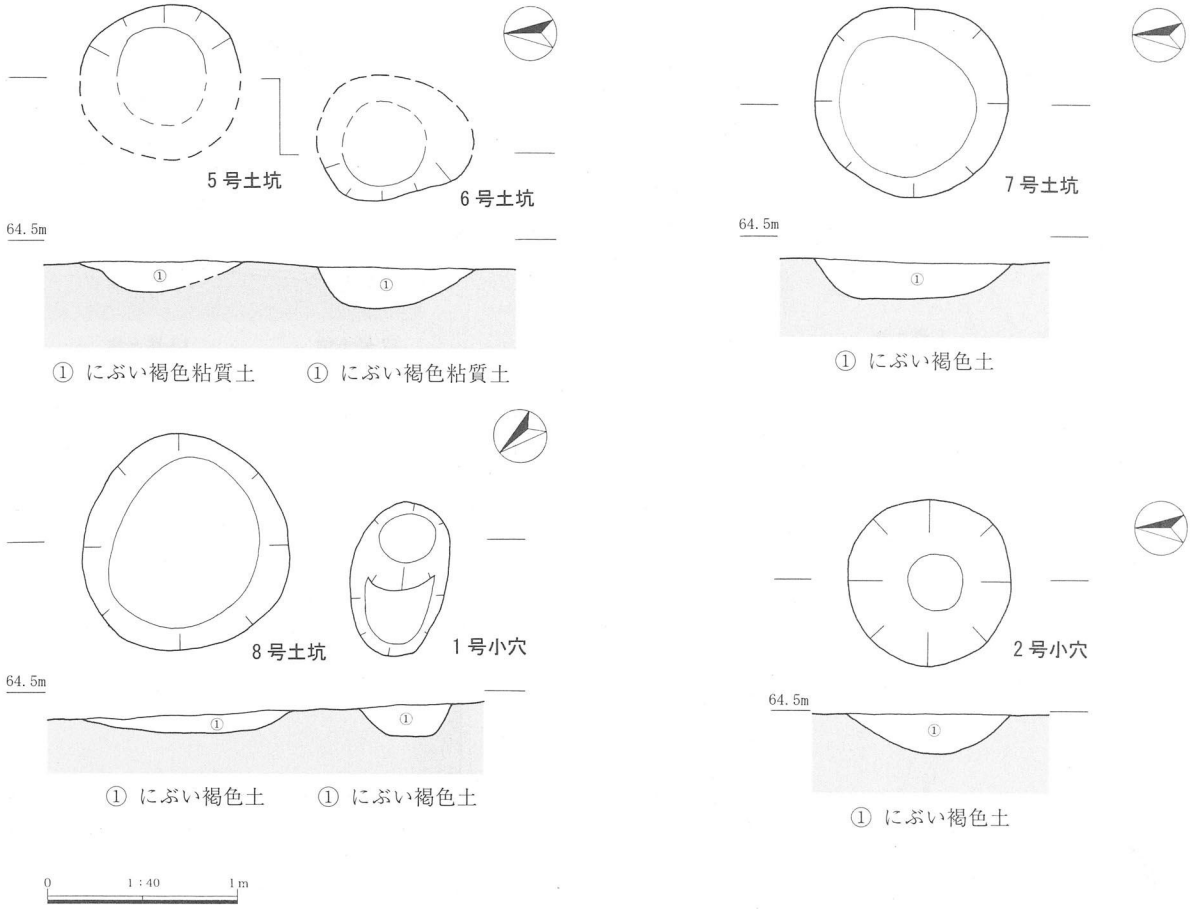
土は６層に分層できた。断面の観察から再掘削された可能性がある。遺物は出土していない。

4号土坑（第13図）

K10・11区で検出した。東側はトレンチにより破壊したものの平面形態は円形を呈していたと推測する。断面形態は、袋状を呈する。直径約96㎝、深さ約41㎝を測る。覆土は、４層に分層できた。②層は地山土を含み、壁崩落土の可能性がある。形態から、小型の貯蔵穴の可能性がある。遺物は出土していない。

5・6号土坑（第14図）

両土坑とも、K11区で検出した。形態、規模、覆土の類似した土坑である。平面形態は円形もしくは不整円形と推測する。断面形態は、弧を描く。直径は約84㎝、深さは18～22㎝を測る。覆土は単層で、にぶい褐色粘質土



第14図　5～8号土坑および1・2号小穴

である。遺物は出土していない。

7号土坑（第14図）

L10区で検出した。平面形態は円形を呈し、平坦な底面を持つ。直径約102㎝、深さ約22㎝を測る。覆土は単層、遺物は出土していない。

8号土坑（第14図）

K９区で検出した。平面形態は不整円形を呈し、平坦な底面を持つ。直径約114㎝、深さ約13㎝を測る。覆土は単層、遺物は出土していない。

1号小穴（第14図）

K９区で検出した。平面形態は長楕円形を呈し、北側にテラスを持つ。長軸約86㎝、短軸約53㎝、深さ約18㎝を測る。覆土は単層、遺物は出土していない。

2号小穴（第14図）

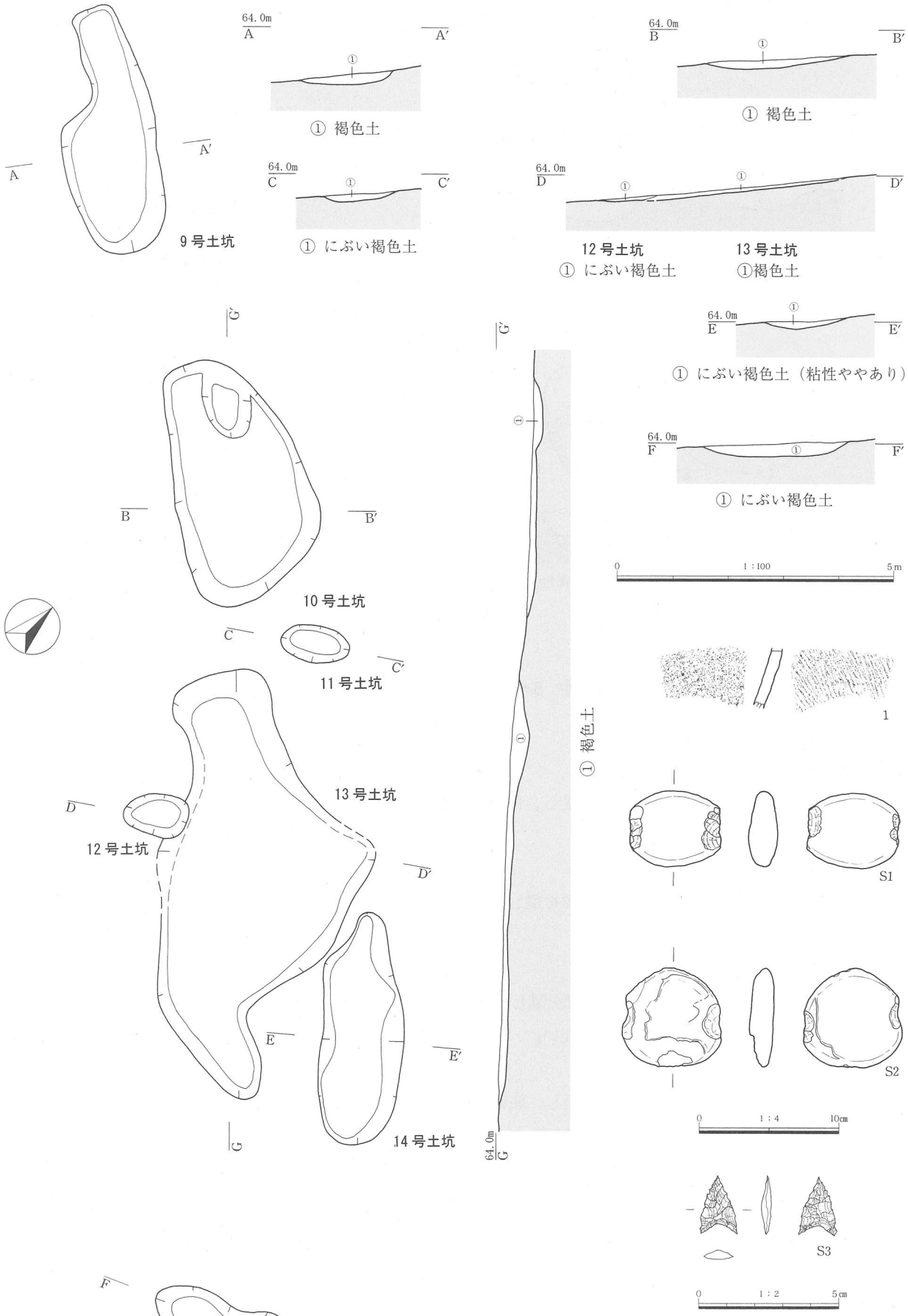
K10区で検出した。平面形態は円形を呈し、底面は丸底、直線的に広がる壁を持つ。直径約88㎝、深さ約22㎝を測る。覆土は単層、遺物は出土していない。

9～15号土坑（第15図）

調査区南東、傾斜変換点に沿って検出した。深さ平均約６㎝の浅い土坑群である。９・10・13・14号土坑は、平面形態が不整形で大型、覆土は褐色土である。11・12・15号土坑は、平面形態が不整楕円形を呈し小型、覆土は単層で、にぶい褐色土である。遺物は出土していない。

包含層（Ⅲ層）出土遺物（第15図）

縄文土器と石鏃、石錘、薄片等の石器が出土した。１は縄文土器深鉢である。外面には撚糸文が施されている。縄文時代中期の里木式に相当しよう。Ｓ１は、安山岩製の打欠石錘である。Ｓ２は、黒曜石製の石鏃である。



第16図　遺物包含層（Ⅲ層）出土遺物

第15図　9～15号土坑

第３節　奈良・平安時代の調査

調査の概要

調査区南東平坦部には、奈良・平安時代の遺物包含層であるⅡ層が広がっていた。この層中からは、縄文時代中期から平安時代前期にかけての遺物が多く出土している。この層の除去後、直下に遺構面を確認した。この面で検出した遺構は、覆土・出土遺物などから奈良・平安時代ものと考えている。Ⅰ層直下においても、覆土等から当該期に含まれる可能性がある遺構を検出した部分がある。Ⅰ・Ⅱ層直下の遺構面を併せて第２遺構面とした。攪乱を受けている部分が多く検出は困難であったが、この面において掘立柱建物２棟、土坑11基、溝３条、硬化面１面、小穴200基を検出した。性格不明の遺構も多いが、一般の集落には少ない大型の掘立柱建物や、緑釉陶器などの遺構・遺物が含まれていた。官衙あるいは有力者の居宅等の可能性があろう。当該期の遺物、遺構ともに調査区南東にのみ集中しており、遺跡の北端を調査したものと考えている。調査面積は約4630㎡である。

1号掘立柱建物（第19図、巻頭カラー図版１、図版４・５）

G10、H９・10区で検出した。桁行５間、梁行２間の側柱建物である。桁行（長軸）約10.6m、梁行（短軸）約4.2mを測る。主軸は調査区北東の斜面とほぼ並行しており、真北から西へ約55°傾く。柱間寸法は桁行・梁行ともに約２～2.2m、平均で約2.1m（７尺）。柱穴掘り方は円形もしくは不整円形で、直径約36～75㎝、深さ約22～52㎝を測る。多くの柱穴が後世の攪乱を受けており、正確な数値を提示しづらい。しかし、当該期の国・郡衙などの中心建物と比べ、規模の割には各柱穴の底面レベルや規模にばらつきがあり、柱間寸法や柱筋がそろっていないことが指摘できよう。柱穴３・４・12・13では、直径20～30㎝の柱痕跡を確認した。遺物は出土していない。隣接する２号掘立柱建物は、規模・方向が近似するものの柱穴からの出土遺物が多い。また、両建物の間隔が約３m（10尺）と短く、同時期に並存していた可能性は低い。したがって、１号を建て替えて２号を構築した可能性がある。後述する２号の年代観から、１号は９世紀後半のものと推測する。

2号掘立柱建物（第20・21図、巻頭カラー図版１・３・４、図版４・５・10）

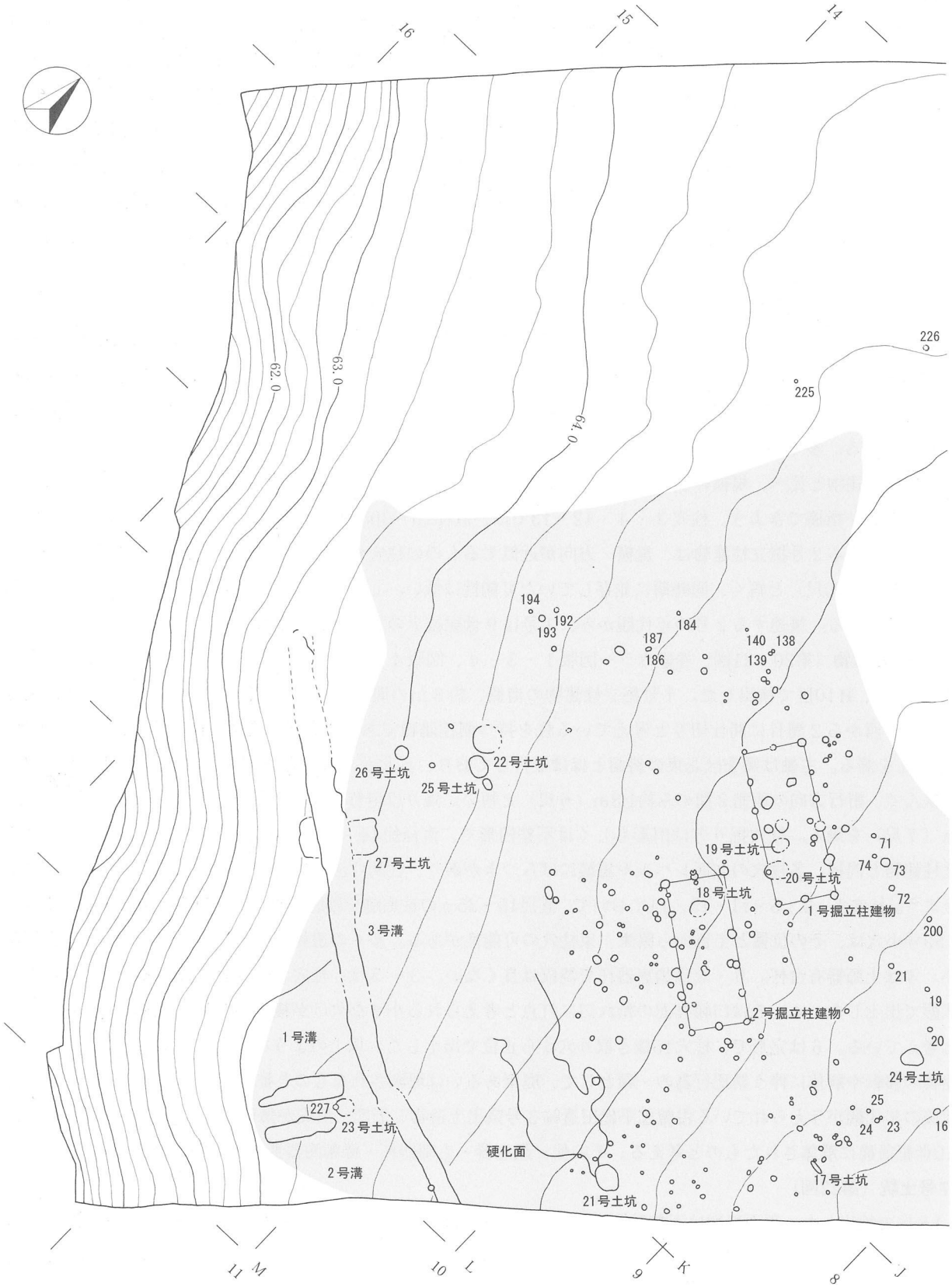
I９・10、H10区で検出した。１号掘立柱建物の南側、約３mの間隔をあけて並行している。桁行５間、梁行２間で、西から２間目に間仕切りと考えている柱を持つ側柱建物である。桁行（長軸）約10.3m、梁行（短軸）約4.2mを測る。主軸は調査区北東の斜面とほぼ並行しており、真北から西へ約56°傾く。柱間寸法は、間仕切りを挟んで、桁行方向の西側２間のみ約1.8m（６尺）と短い。残りは桁行・梁行ともに約２～2.2m、平均で約2.1m（７尺）を測る。柱穴掘り方は円形もしくは不整円形で、直径約44～69㎝、深さ約20～52㎝を測る。１号掘立柱建物と同様、各柱穴の底面レベルや規模にばらつきがあり、柱間寸法や柱筋がそろっていないことが指摘できよう。柱穴１・２・５・11・13・14において、直径15～25㎝の柱痕跡を確認した。99・103・104・152～154・159号小穴は、その位置と土色から脇束、束柱穴の可能性がある。多くの遺物が出土している。２・３は土師器杯。４は土師器有台杯。５・６は須恵器杯で焼成は良くない。３～５は、柱穴８抜き取り穴から、正位で並んだ状態で出土した。４・５は口縁外面の割れ口に打点と考えられる小さな欠けが複数存在し、意識的に打ち欠いたと考えている。６は完形で、柱穴15抜き取り穴から正位で出土した。以上のような出土状況などから、３～６は建物の移転や解体に伴う祭祀行為の一環として、廃棄あるいは埋納されたものと推測できる。５・６は、10世紀前後の年代観が与えられている古曽志平廻田遺跡３号窯出土遺物と形態・焼成が類似する。したがって本遺構も、10世紀前後に解体されたものと考える。その他、須恵器・土師器杯・緑釉陶器皿などの細片が出土している。

17号土坑（第22図）

I８区で検出した。平面形態は不整長楕円形を呈し、底面は丸底で壁は弧を描いて立ち上がる。長軸約34㎝、短軸約14㎝、深さ約18㎝を測る。Ｆ１は椀型鍛冶滓（含鉄）、Ｆ２は鍛冶滓（含鉄）である。この他、須恵器甕、土師器杯が出土している。

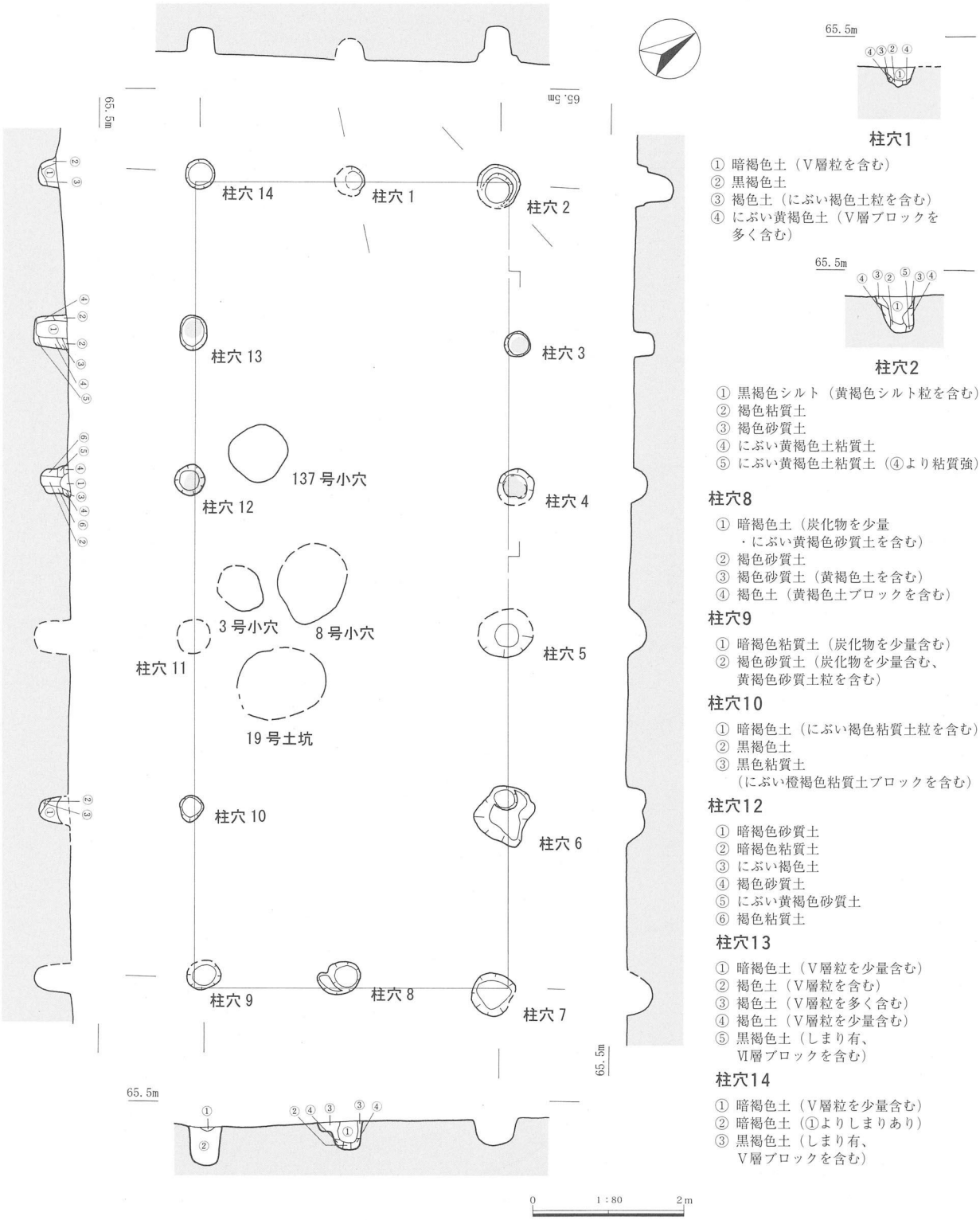
18号土坑（第22図）

I10区で検出した。東側は攪乱を受けている。平面形態は不整楕円形と推定される。断面形態は弧を描く。長



第17図　平安時代遺構分布図（1）

第18図　平安時代遺構分布図（2）

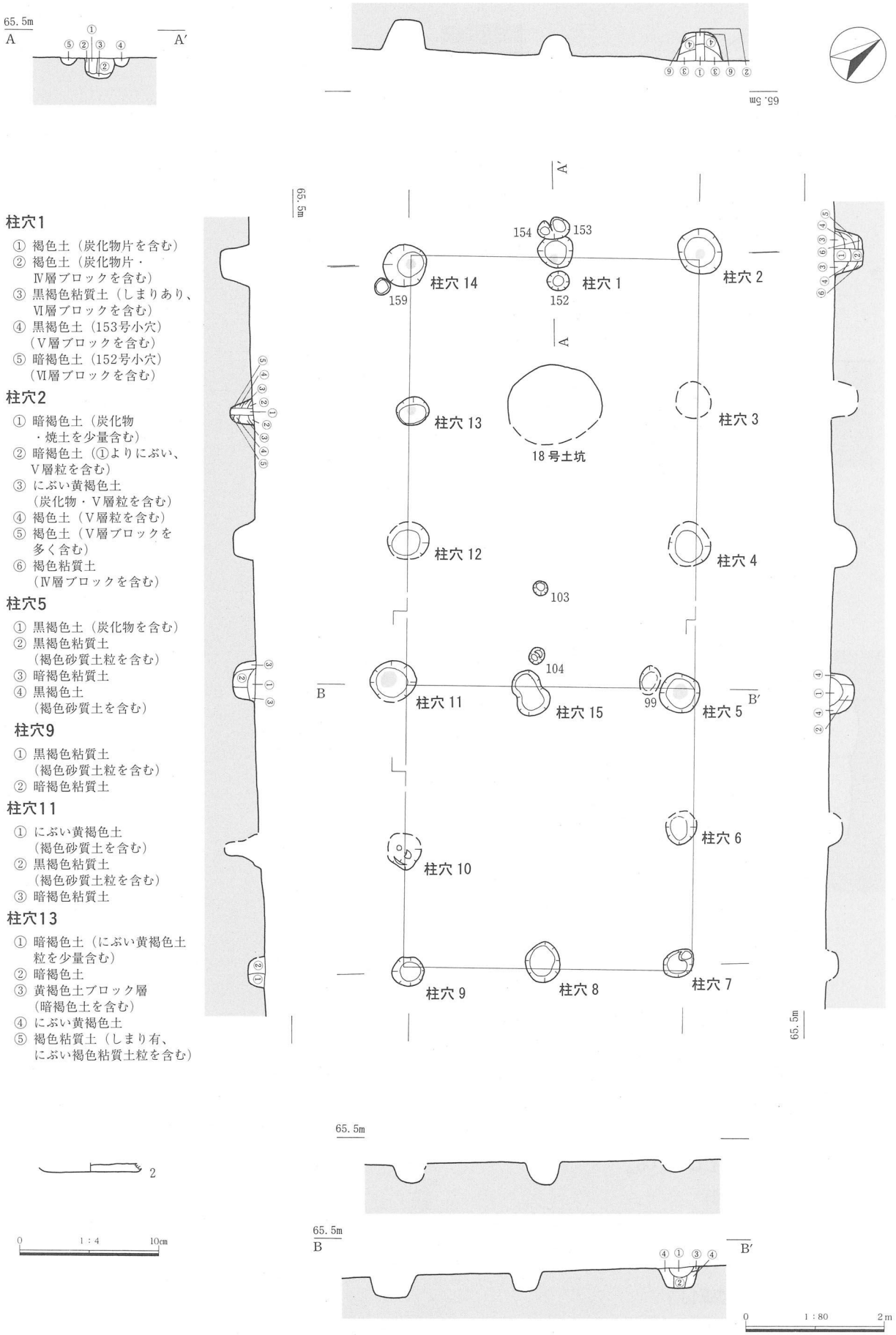


第19図　1号掘立柱建物

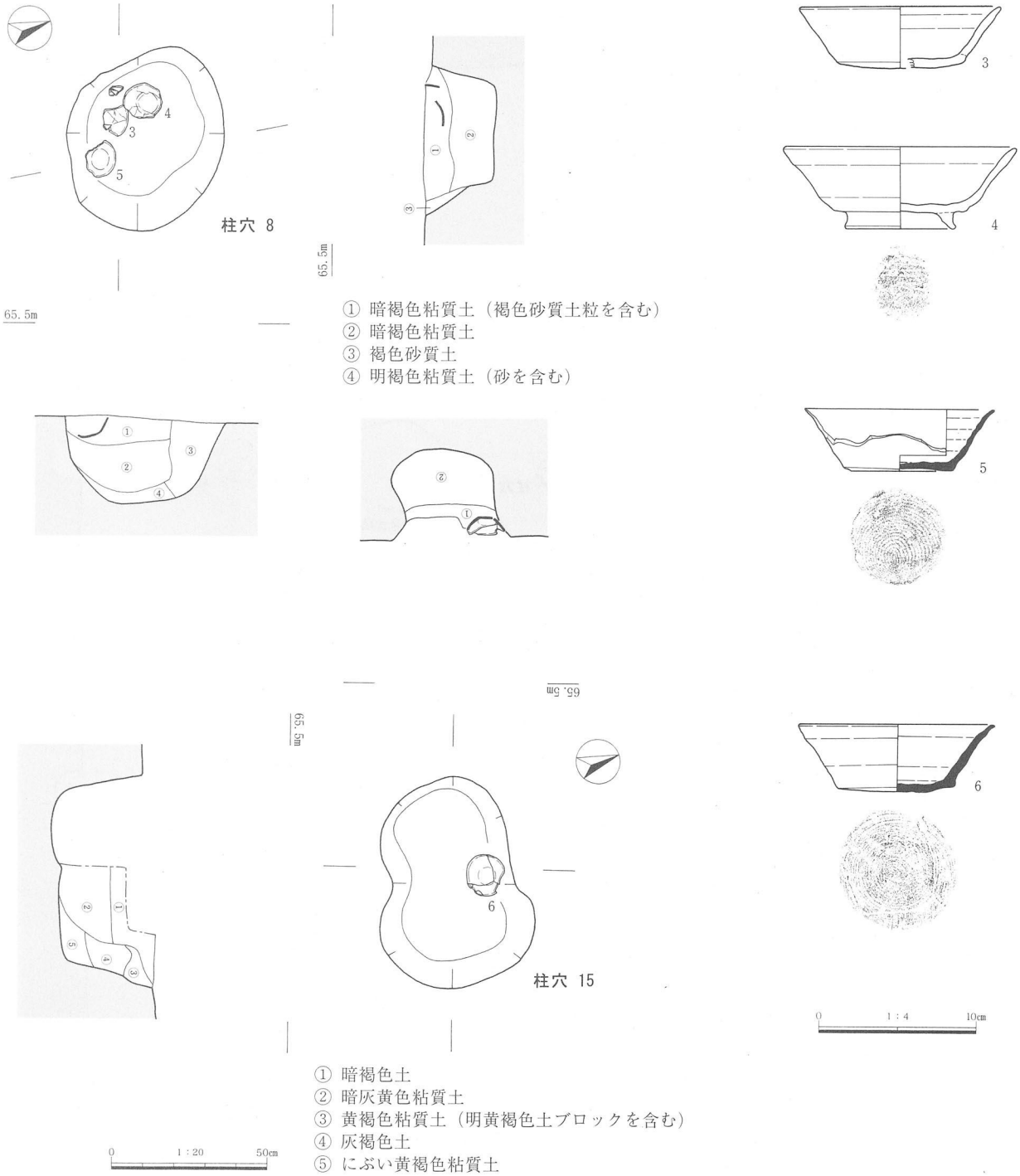
軸約134㎝、深さ約48㎝を測る。覆土は、３層に分層できた。地山ブロックが多く含まれており、人為的に埋め戻されたと考える。遺物は出土していない。

19号土坑（第22図、図版６・11）

H10区で検出した。平面形態は不整楕円形を呈し、北東端に小穴を有する。長軸約120㎝、短軸約90㎝、深さ約17㎝を測る。覆土は、３層に分層できた。北東小穴上には20㎝大の礫（安山岩）があり、そのうち一つの表面は赤く変色していた。７は土師器杯、口縁部を欠くが、底部外面に板圧痕が残ることから９世紀後半のものと推



第20図　2号掘立柱建物および出土遺物（1）



第21図　2号掘立柱建物および出土遺物（2）

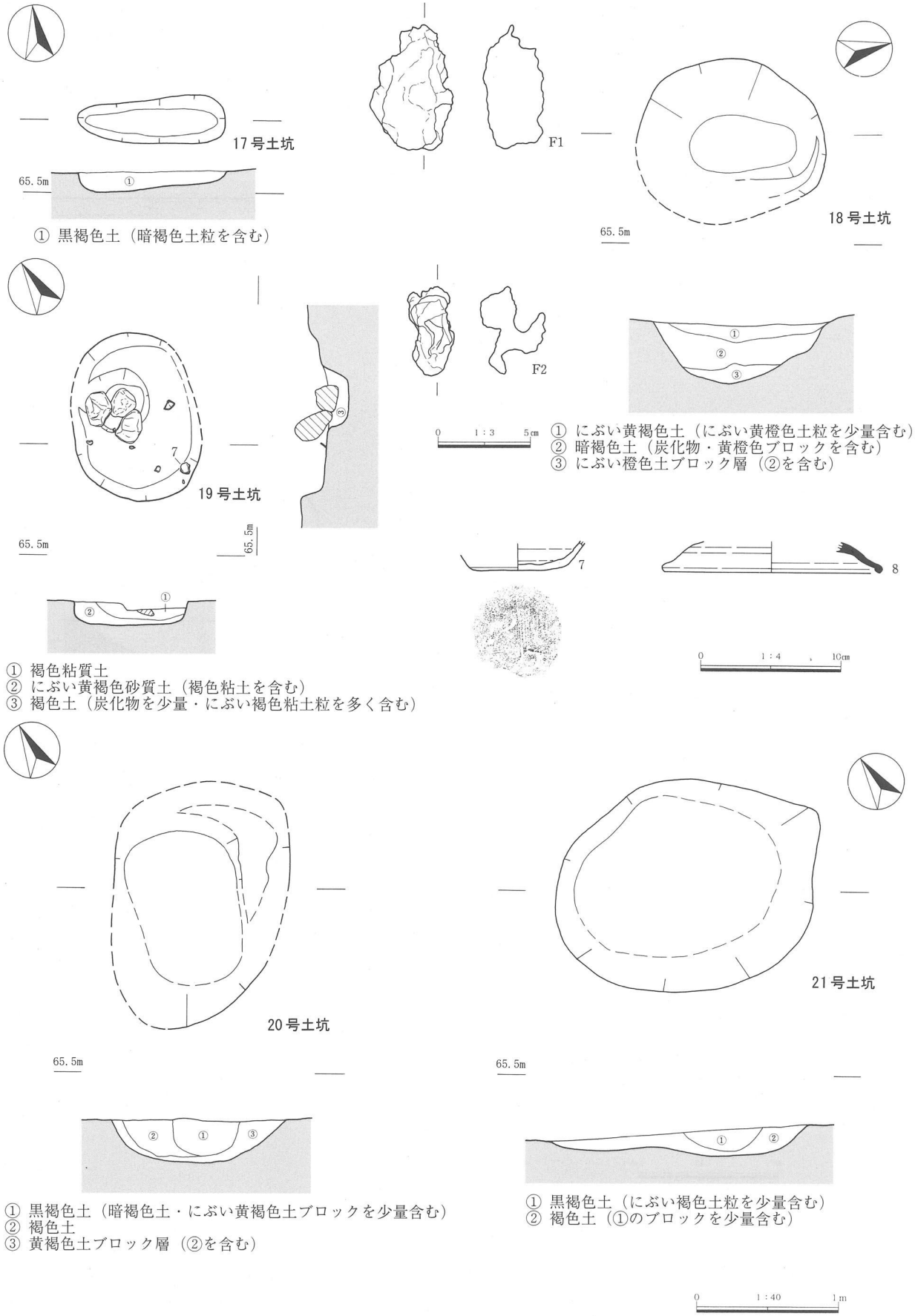
測する。８は須恵器蓋、８世紀後半～９世紀前半とされる高広遺跡ⅣB期と同時期のものであろう。その他、土師器杯・須恵器杯が出土している。

20・21号土坑（第22図）

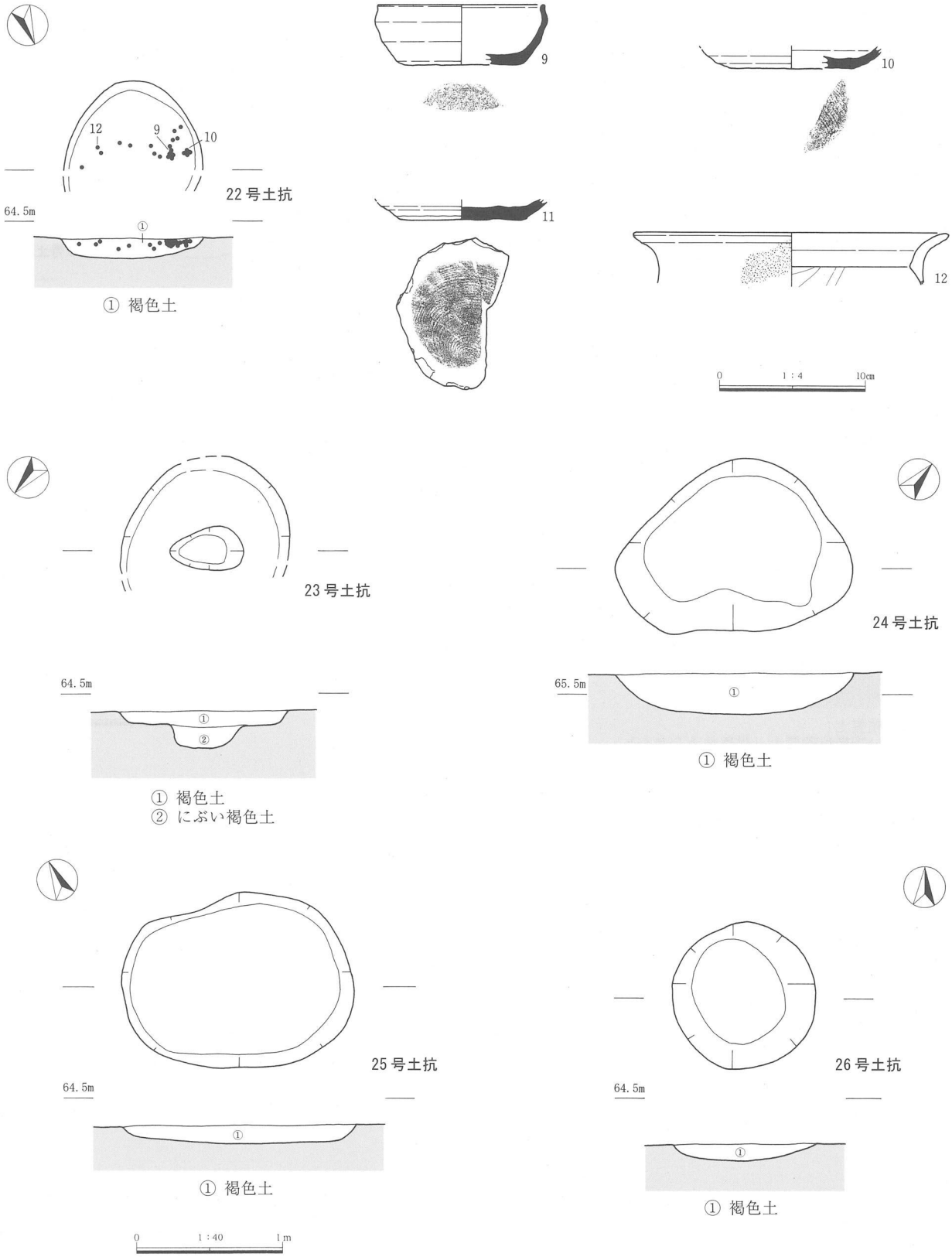
20号はH10区、21号はJ９区で検出した。共に攪乱を受けており、平面形態は不整楕円形と推定される。遺物は出土していない。

22号土坑（第23図、図版11）

I12区で検出した。北側を攪乱されるが、平面形態は不整楕円形と推定される。短軸約95cm、深さ約14cmを測る。覆土は単層。古代の土器が多く出土している。９～11は回転糸切の須恵器杯で、口縁部は内湾して立ち上が



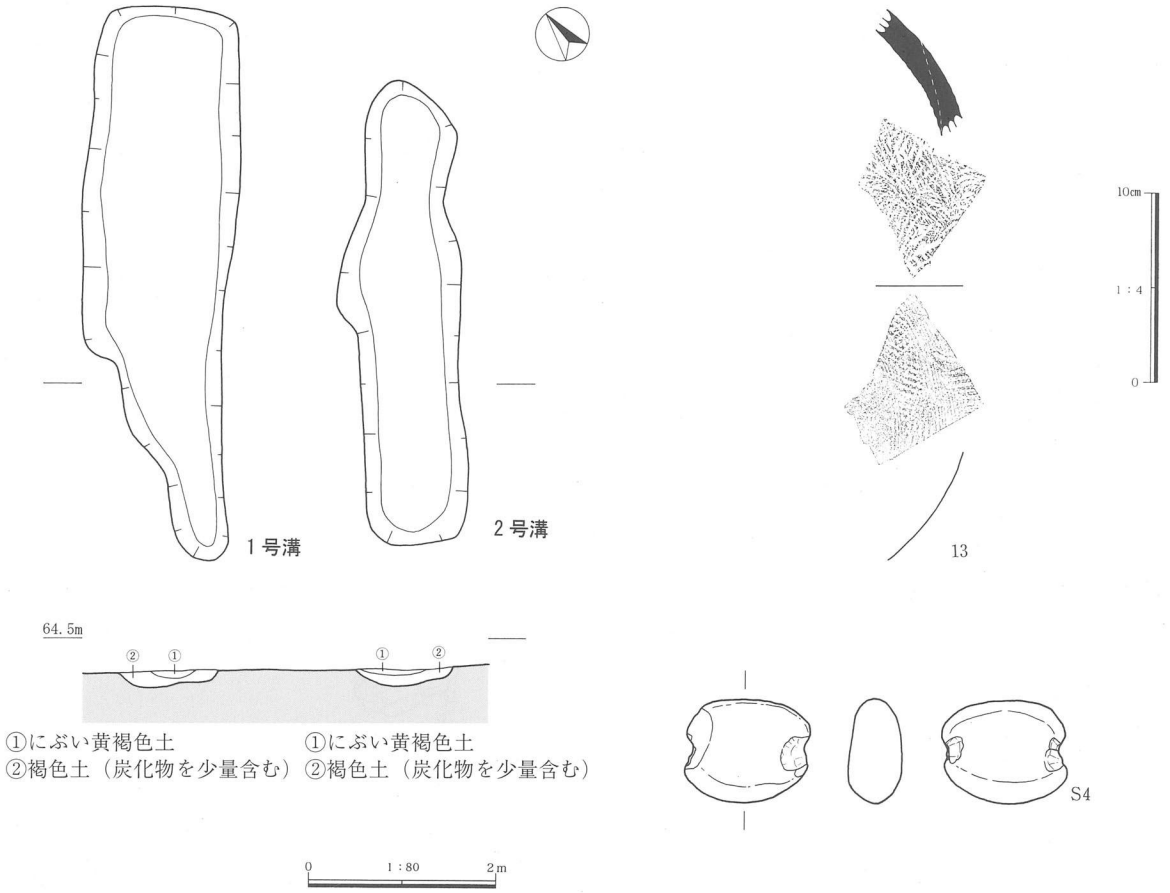
第22図　17～21号土坑および出土遺物



第23図　22～26号土坑および出土遺物

る、11には口縁部割れ口の外面側に打点と考えられる小さな欠けが連続して観察でき、意図的に打ち欠かれたと推測できる。12は土師器甕である。その他、土師器杯・須恵器甕等が出土している。出土した須恵器が高広遺跡ⅣA期（８世紀中葉～後半）のに相当することから、本遺構の時期は奈良時代後半と推定する。

23～26号土坑（第23・24図）



第24図　1・2号溝および出土遺物

23号はK11、24号はH８、25・26号はI12区で検出した。ともに平面形態は不整楕円形を呈し、底面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。

27号土坑（第25図）

J12区で検出した。３号溝に切られる。平面形態は不整形で、長軸562㎝、短軸177㎝、深さ約14㎝を測る。図化しなかったが須恵器甕の細片が出土している。

1・2号溝（第24図）

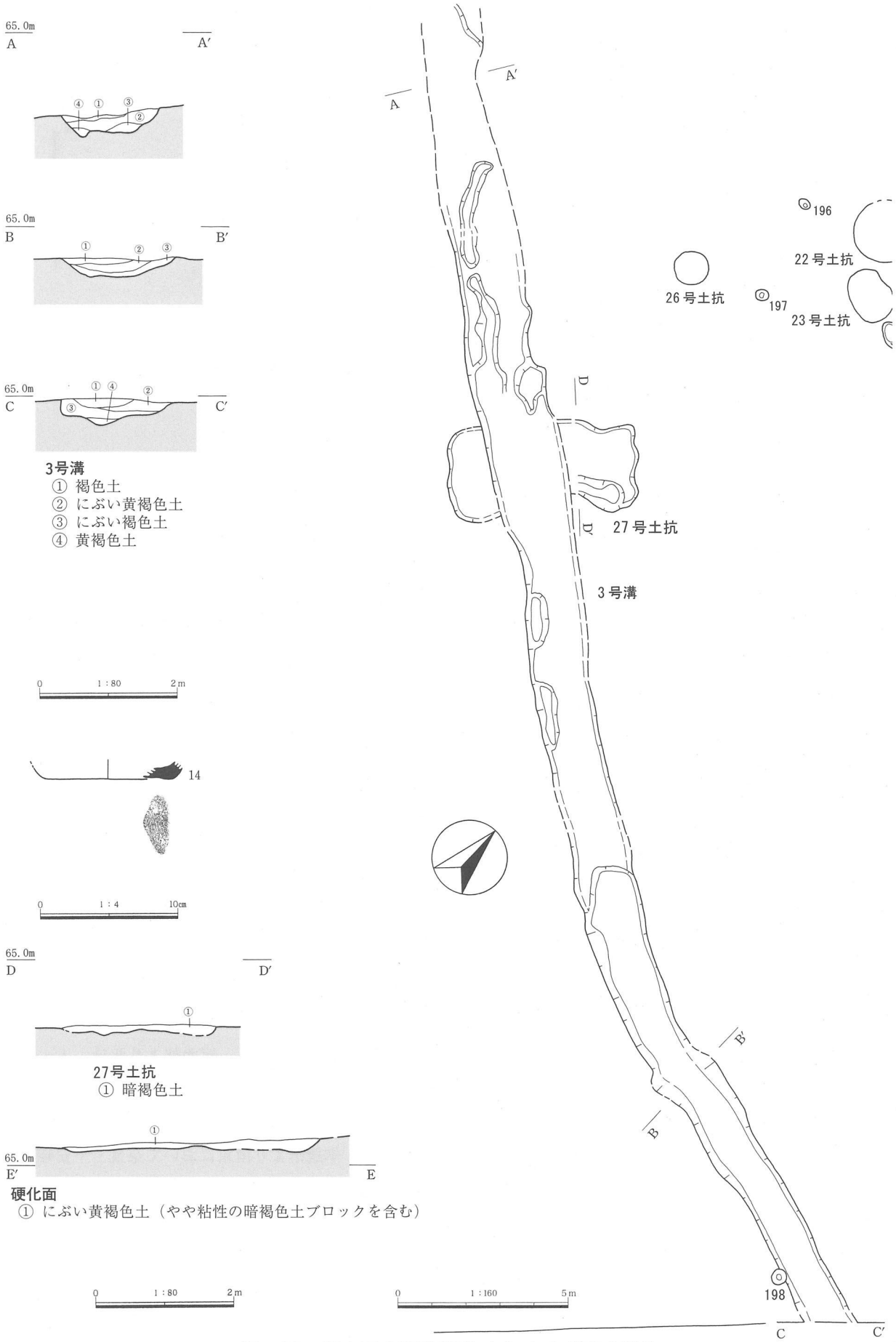
K・L11区で検出した２本の並行する溝である。幅は１号が約83㎝、２号が約66㎝を測る。覆土ほぼ同一で、ともに２層に分層できた。古代の土器とともに石錘・黒曜石剥片などが出土している。13は須恵器横瓶、内面には放射状当具痕が、外面には平行叩き目とカキ目が残る。Ｓ４は安山岩製の打欠石錘。

3号溝（第25図、図版６）

調査区南西の傾斜変換点に沿って検出した。11ライン付近で約13°北に屈曲する。屈曲部より北は、１・２号掘立柱建物の主軸とほぼ並行し、南は調査区外へと延びる。底面はほぼ平坦であるが、西端が一段深くなる部分が断続する。須恵器甕や土師器杯といった古代の土器が出土している。14は須恵器杯で、底部の切り離し技法は回転糸切りである。１・２号掘立柱建物の主軸方向と並行しており、本遺構より南東において奈良・平安時代に属する遺構が極わずかであることから、区画溝と推測する。

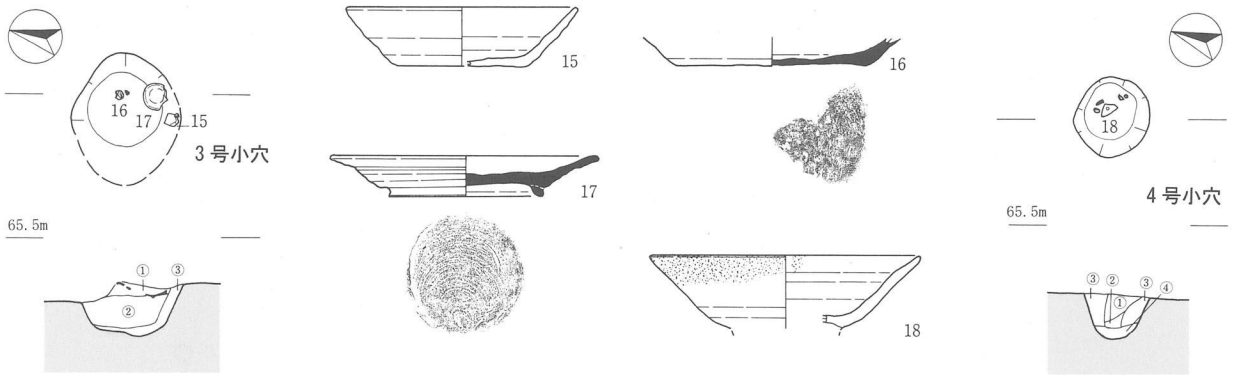
硬化面（第26図、図版７）

調査区南東、２号掘立柱建物と３号溝のほぼ中間で検出した。硬化面直下にはにぶい黄褐色土（網掛け部分）があり、硬化面の周辺にも広がっていた。検出できなかったが、この上面にも硬化面が存在していたと推定する。また、ベースとなるⅢ層との境界が不明確であり、明確な掘り込みを持たない。使用するうちに形成された可能性を指摘しておきたい。



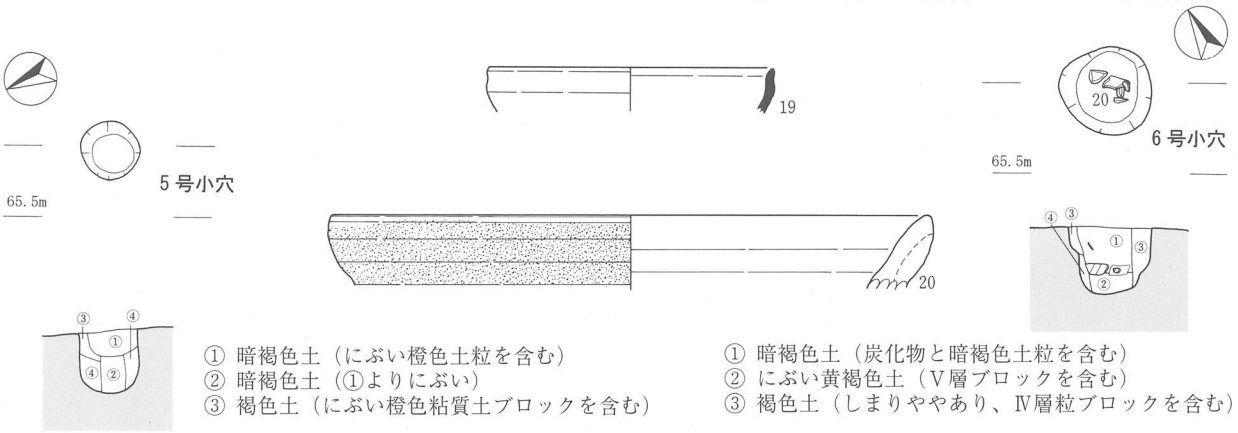
第25図　調査区南部遺構群（1）および出土遺物

第26図　調査区南部遺構群（2）



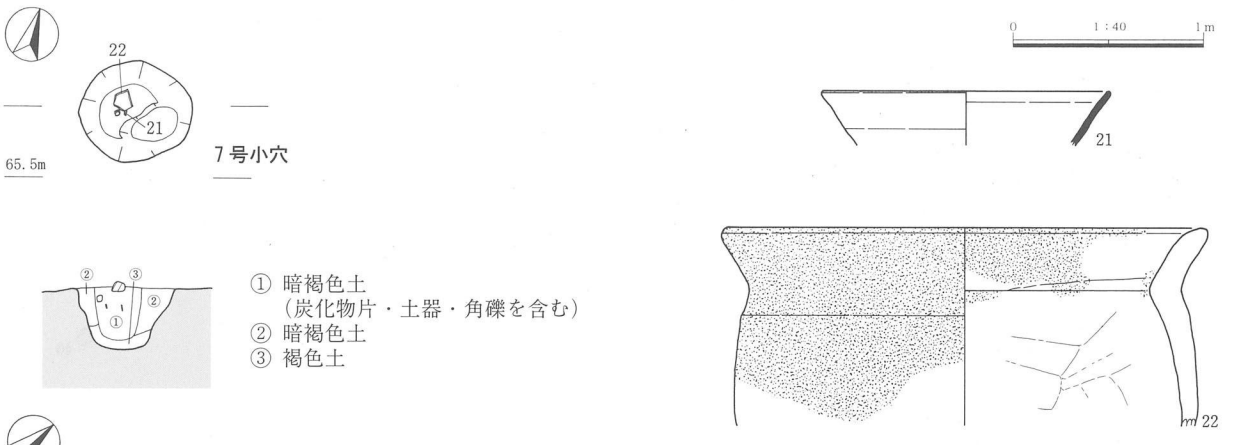
① 褐色土（にぶい褐色土粒を少量含む）
② 暗褐色土（炭化物・にぶい褐色土粒を含む）
③ にぶい褐色土（暗褐色土との混土）

① 暗褐色土
② 暗褐色土（にぶい黄褐色粘質土ブロックを含む）
③ 褐色土（暗褐色土ブロック・炭化物を含む）
④ にぶい褐色土（暗褐色土ブロックを少量含む）

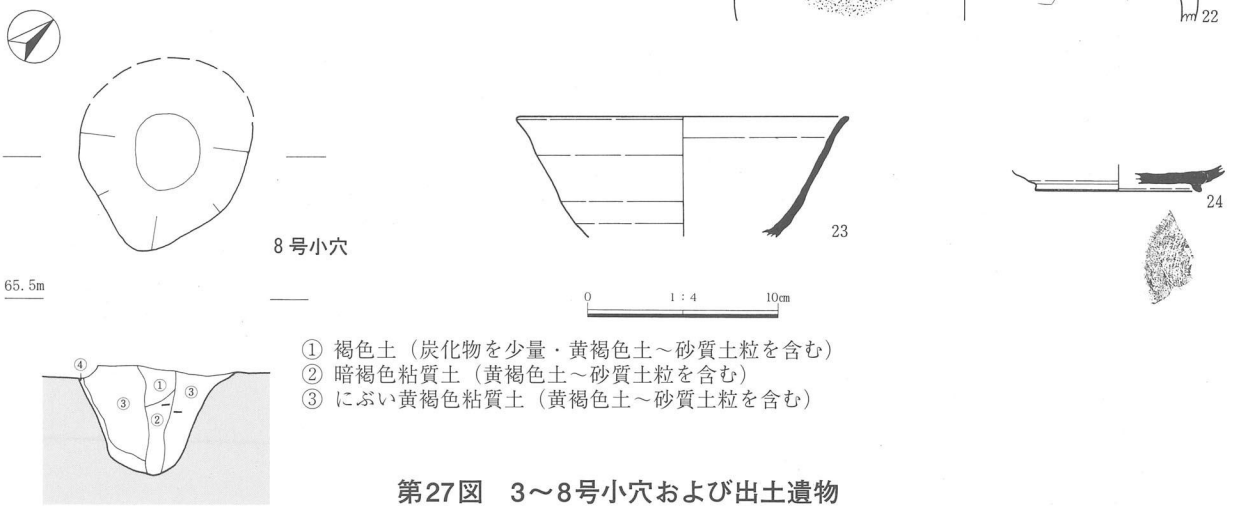


① 暗褐色土（にぶい橙色土粒を含む）
② 暗褐色土（①よりにぶい）
③ 褐色土（にぶい橙色粘質土ブロックを含む）

① 暗褐色土（炭化物と暗褐色土粒を含む）
② にぶい黄褐色土（Ⅴ層ブロックを含む）
③ 褐色土（しまりややあり、Ⅳ層粒ブロックを含む）



① 暗褐色土
（炭化物片・土器・角礫を含む）
② 暗褐色土
③ 褐色土



① 褐色土（炭化物を少量・黄褐色土～砂質土粒を含む）
② 暗褐色粘質土（黄褐色土～砂質土粒を含む）
③ にぶい黄褐色粘質土（黄褐色土～砂質土粒を含む）

第27図　3～8号小穴および出土遺物

第3表　小穴観察表（1）　※凡例５参照

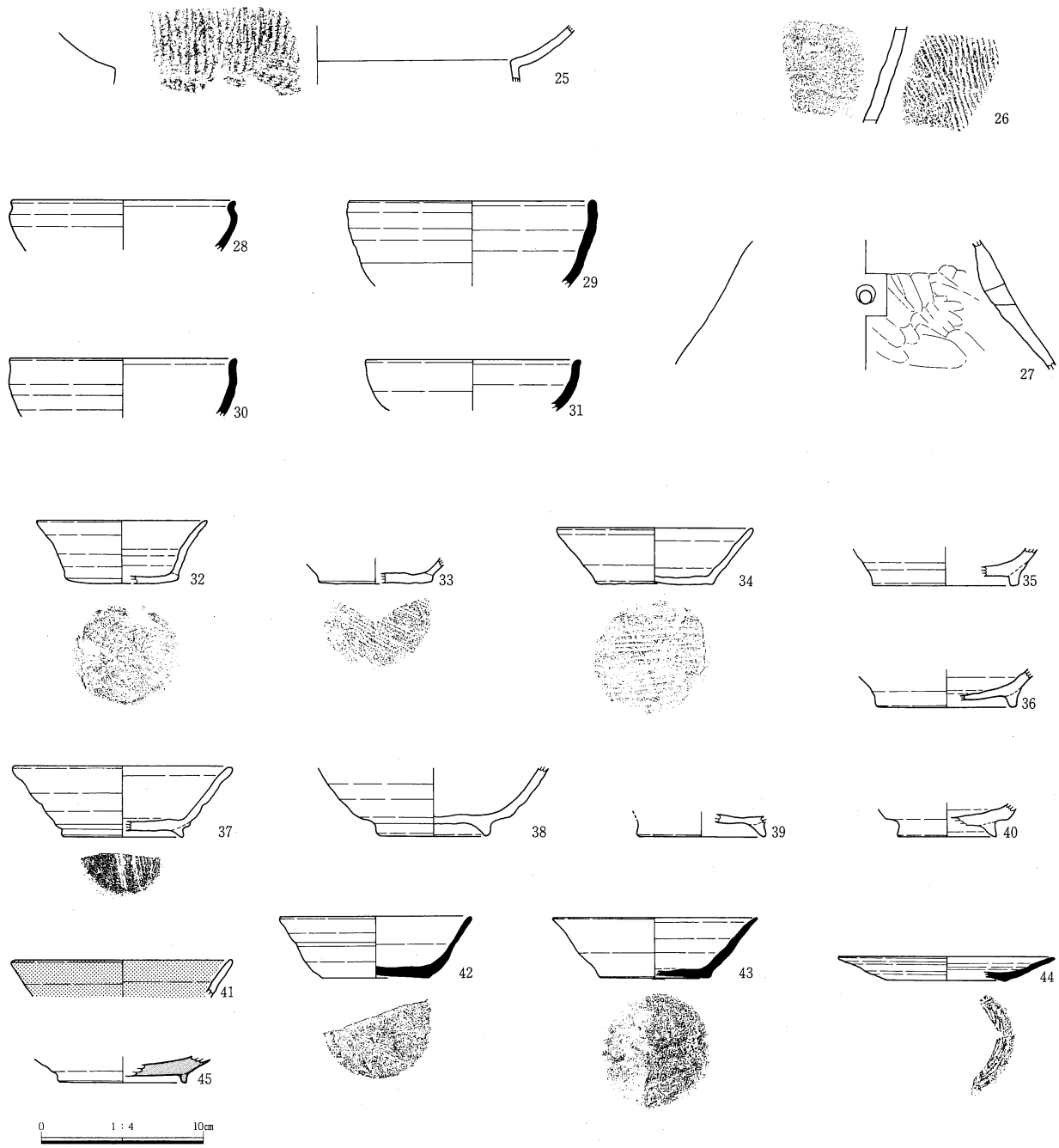
No.	主	抜	柱	深さ(cm)	No.	主	抜	柱	深さ(cm)	No.	主	抜	柱	深さ(cm)	No.	主	抜	柱	深さ(cm)	No.	主	抜	柱	深さ(cm)
3	A			27	44	E		B	17	85	A			20	126	A			41	167	D			31
4	B	A		22	45	F			36	86	B			12	127	J		B	29	168	D			
5	B	A		32	46	A			20	87	C	A		23	128	D			29	169	D			
6	B	A		37	47	B			13	88	C	B		39	129	D			19	170	B			21
7	A	A		31	48	D			40	89	A			19	130	A			13	171	D			18
8	C	B		53	49	B			19	90	A			30	131	B			13	172	D			33
9	B			14	50	C		A	24	91	H			25	132	A			45	173	A			19
10	B		A	37	51	B			14	92	A			36	133				52	174	B			8
11	B		D	33	52	B		A	49	93	C	A		36	134	A			18	175	A			40
12	A			17	53	C	A		49	94	A			30	135	D			24	176	A			27
13	C		A	12	54	D			24	95	B			28	136	B			19	177	A			27
14	D			17	55	B		A	54	96	B			20	137	D			48	178	A			24
15	A			36	56	F	A		26	97	D			16	138	A			36	179	D			23
16	D			33	57	D			16	98	B			24	139	D			30	180	D			30
17	A			35	58	D			29	99				25	140	D			17	181	D			15
18	B			21	59	C		A	41	100	B	D		17	141	B			24	182	D			33
19	B		A	37	60	C		D	22	101	B		A	29	142	D			17	183	A			33
20	B		A	24	61	B		A	28	102	B		A	21	143	D			17	184	A			18
21	D			30	62	B			28	103	B		D	19	144	A			20	185	A		A	34
22	B		A	29	63	J	B		30	104	D			35	145	D			20	186	B			45
23	A			29	64	A			33	105	B	A		25	146	B			13	187	A			21
24	B			19	65	B	A		31	106				25	147	A			25	188	A			24
25	B			19	66	A			20	107	B			26	148	B			13	189	B			
26	A			44	67	A			22	108	B	D		27	149	A			31	190	C	C	A	24
27	A			30	68	B			19	109	A			35	150	A			21	191	B			23
28	C			17	69	B			21	110	B			45	151	J	A		37	192	B			24
29	A			13	70	B			21	111	A			31	152	A			25	193	A			36
30	A			48	71	A			18	112	A			20	153	D			22	194	B			25
31	B			15	72	B	A		45	113	D			28	154				6	195	A	A		42
32	D			25	73	D			14	114	A			20	155	B			15	196	E		C	37
33				13	74	D			21	115	D			38	156	A			31	197	D			57
34	C	B		29	75	B		D	45	116	C	A		27	157	B			28	198	C	D		52
35	C		A	25	76	D			17	117	D			17	158	H			26	199	A			
36	B			16	77				31	118	B		A	61	159	B	D		24	200	A			
37	B		A	36	78	A			13	119	D			17	160	B	D		46	225	A			
38	B	D		31	79	B			18	120	A			28	161	A	D		41	226	A			
39	D			16	80	A			21	121	B	A		29	162	B			27	227	D			41
40	B		C	25	81	D			19	122	A			29	163	C			29	228	C		D	58
41	B			30	82	C	A		30	123	A			31	164	C		D	37	229	C			17
42	B			21	83	A			20	124	B			30	165	D	A		37	230	A			16
43	A			13	84	C		D	24	125	A			28	166	B			22	231				30

小穴群（第25・26図、第３表）

調査区南東部で小穴200基を検出した。１・２号掘立柱建物以外、建物や柵列となるようなものは確認できなかったが、柱痕跡や抜き取り痕跡を確認できた小穴もある。中には、攪乱や削平が激しかったため復元できなかった建物や柵列の柱穴が含まれている可能性もあろう。遺物の出土した小穴も多い。これらは、１・２号掘立柱建物周辺とその南東側に集中する。代表的なものを第26図に掲載した。

3～8号小穴（第27図、巻頭カラー図版３・４、図版７・11）

３・８号はH10区、４・５号はI10区、６号はJ９区、７号はJ10区で検出した。いずれも平面形態は不整楕円形を呈するか、もしくはそれと想定できる。３号からは15～17が出土した。17は須恵器皿の転用硯である。底部内面の磨耗が強く、ナデの痕跡は確認できない。古曽志平廻田遺跡３号窯出土須恵器と形態が近似しており、15と共に10世紀前後に位置付けられる。15～17はいずれも正位で出土しており、何らかの埋納行為を想定しておきたい。４～７号では柱抜き取り痕と考えられる堆積状況が観察でき、柱穴であった可能性がある。18は土師器有台杯で、４号から出土している。口縁部にタールが付着しており、灯明芯痕も観察できることから灯明皿として使用されたと考える。19は底部回転糸切りの須恵器杯で、５号から出土。20は土師器甕で、６号から出土。21は須恵器杯、22は土師器甕で、７号から出土。23は８号から出土した須恵器椀で、体部は丸みをもち、口縁端部はやや外反する。その形態から、高橋編年Ⅱ～Ⅲ期の緑釉陶器椀を模倣した可能性がある。８号は土層堆積から



第28図　平安時代遺物包含層（Ⅱ層）出土遺物（1）

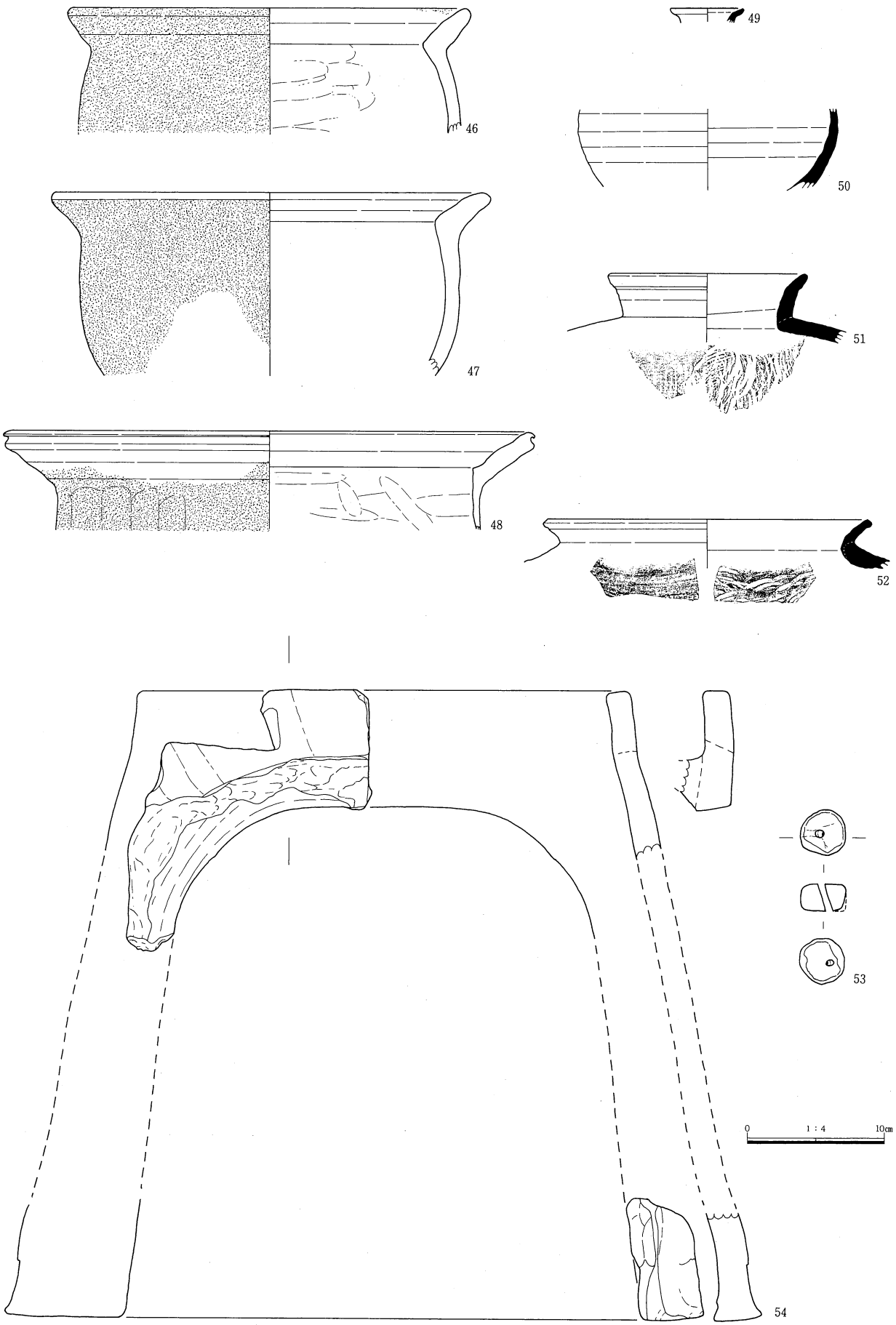
柱穴と考えられるが、断面形態がすり鉢状に近く、他の用途を持つ可能性がある。24は須恵器有台杯で９号から出土。19を除き９世紀後半～10世紀初頭に位置づけられる。

包含層（Ⅱ層）出土遺物（第28～30図、図版10・11・12・13・16）

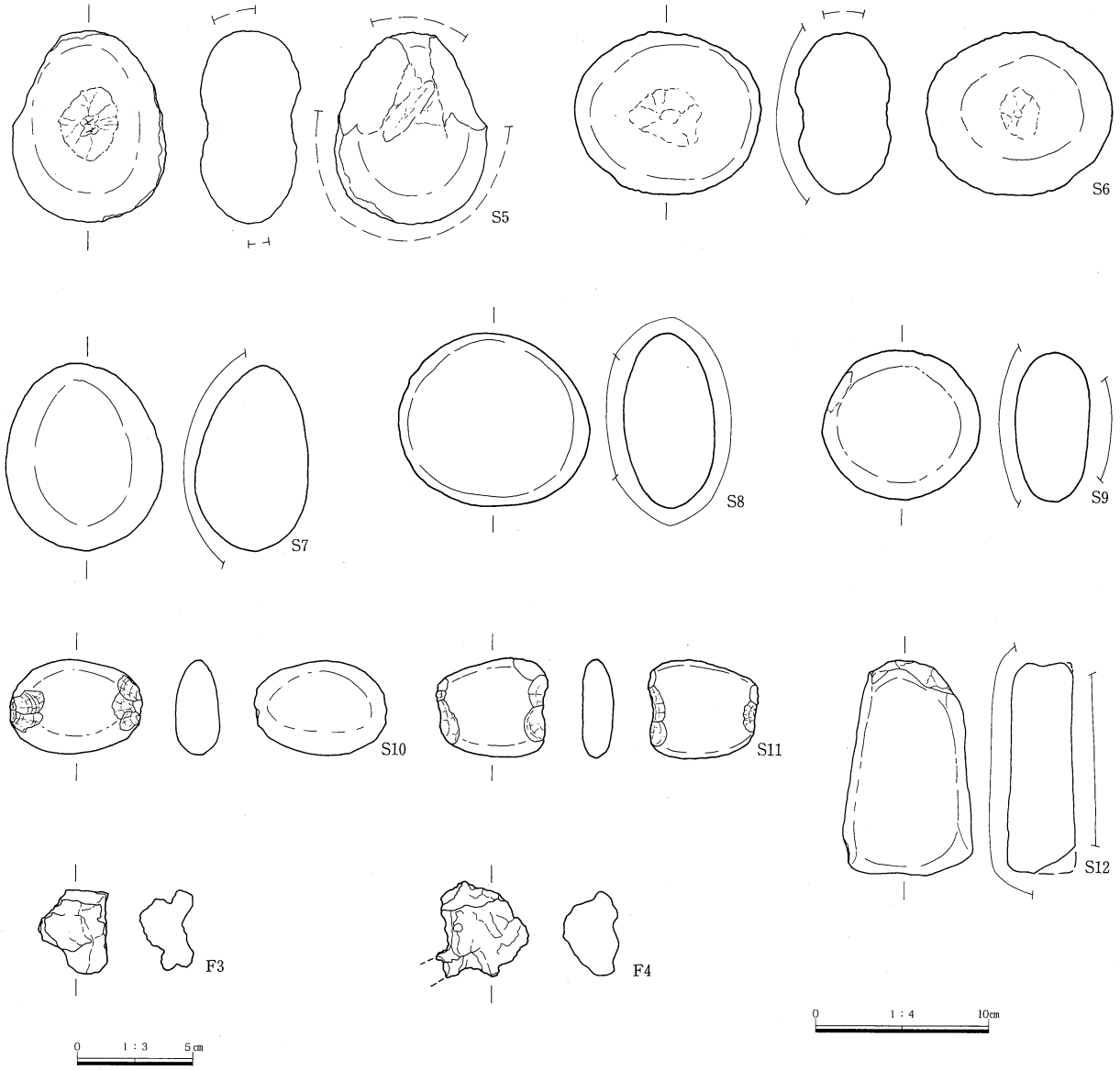
奈良・平安時代の遺物包含層であるⅡ層から当該期の土器・陶器を始めとする、多くの遺物が出土している。

25はキャリパー型の深鉢で、外面に粗い縄文が施されており、頸部は大きくくびれ頸部内面は大きく外側に屈曲する。縄文時代中期の船元式に相当しよう。26は縄文土器深鉢である。外面には拠糸文が施される。縄文時代中期の里木式と推定する。27は古墳時代前期後半～中期初頭の土師器で鼓型器台脚部。

28～45は古代の供膳具である。８世紀中葉～９世紀前半の28～31と、１・２号掘立柱建物の存続期間である９世紀後半～10世紀初頭の32～45に大別した。28～31は底部回転糸切りの須恵器杯。32～34は土師器杯で底部外面に板圧痕を残す。35～40は土師器有台杯で、高台の断面形態が逆台形を呈する35・36と、三角形の37～40に分類できる。底部に板圧痕を残す例は伯耆国庁ＳＤ33に多くあり、９世紀後半でも早い時期に位置付けられて



第29図　平安時代遺物包含層（Ⅱ層）出土遺物（2）



第30図　平安時代遺物包含層（Ⅱ層）出土遺物（3）

いる。32～34・37は形態からも同時期に位置付けられよう。42は赤色塗彩された土師器杯。赤色塗彩土師器は、今回の調査で27点出土している。すべて、褐色がかった顔料を薄く塗っており、伯耆国庁第２段階（８世紀末～９世紀後半）のものと考えている。42・43は須恵器杯、44は須恵器皿で、９世紀中～後葉に位置付けられている高広遺跡Ⅴ期に相当しよう。45は緑釉陶器有台皿である。貼付高台で、内外面はミガキ調整され、厚い釉薬がかかる。胎土は軟質で酸化炎焼成され、含まれる砂粒の量が多い。自然化学分析の結果とあわせ、長門産と考えている。長門産とすれば、高橋編年Ⅱ期（９世紀後半）に位置づけられる。この他、図化しなかったものの灰釉陶器片も出土している。46～48・54は煮炊具である。46～48土師器甕で、46・47は８世紀末～９世紀前葉、48は９世紀末～10世紀初頭のものと推定する。54は土師質の移動式竈である。９世紀前葉以前のもので、周辺の出土遺物から８世紀中葉以降と考えておきたい。49～52は須恵器貯蔵具である。49は小瓶、50は壷、51は横瓶、52は甕で、８世紀中葉～９世紀中葉のものと考える。

53は、土師質の土製品で土錘の可能性がある。Ｓ５・６は凹石で、磨石の転用。Ｓ７～９は磨石。Ｓ10・11は打欠式石錘。以上の石製品は、安山岩製で縄文時代のものと推定する。Ｓ12は安山岩製の砥石である。Ｆ３・４は鉄滓。Ｆ３は鍛冶滓（含鉄）、Ｆ４は椀型鍛冶滓（含鉄）である。

第４節　その他の遺構と遺物

調査の概要

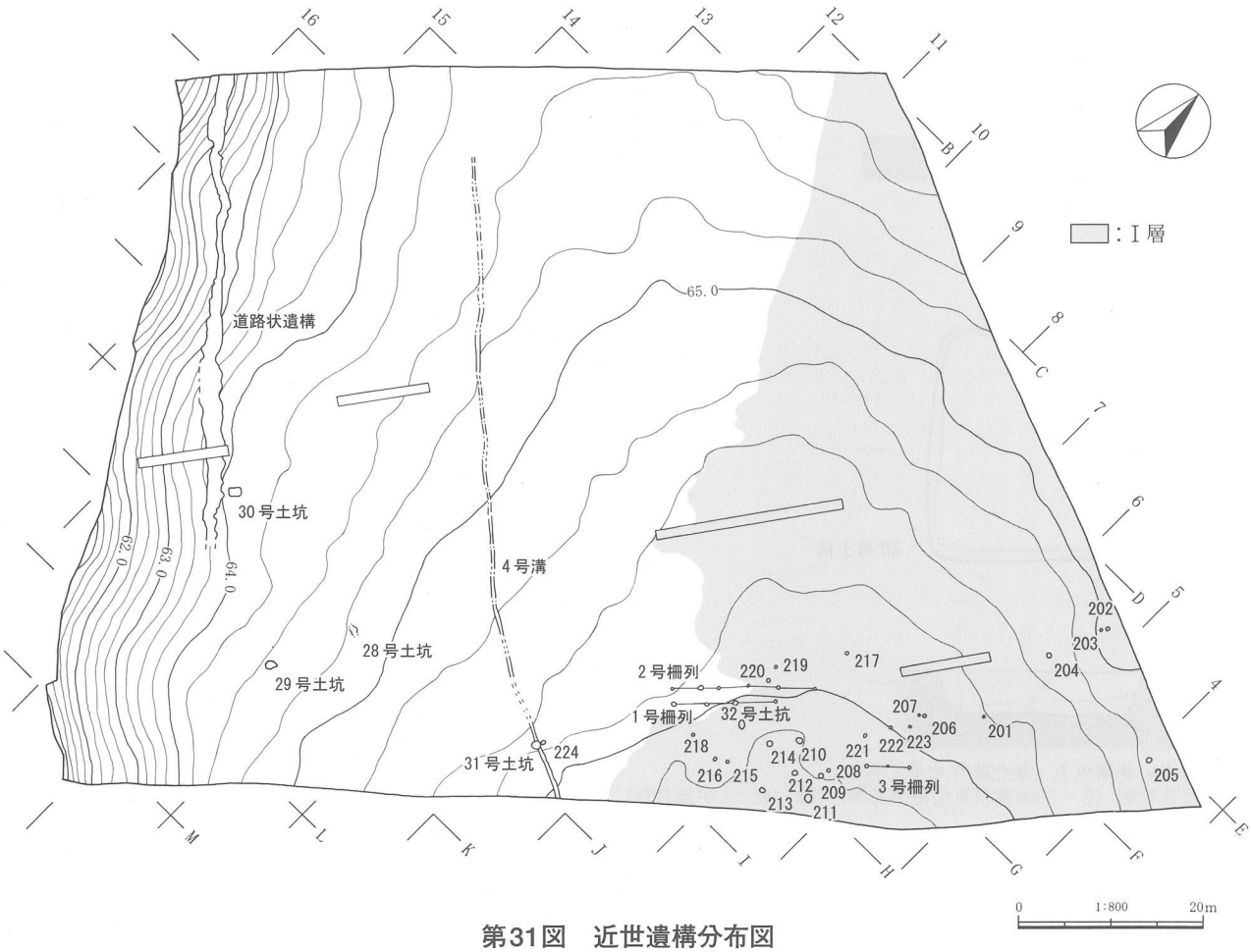
表土および耕作土の除去後、Ⅰ層以下および流土の上面において遺構面を確認し第１遺構面とした。この面で確認した遺構は、Ⅱ層が10世紀初頭を最新とする奈良・平安時代の遺物包含層であることから、10世紀以降に位置付けることができる。しかし、ここで確認した遺構からは10世紀以前の遺物しか出土しておらず、明確な時期を決定することはできなかった。10世紀以降の遺物は、遺構外から近世後半の遺物が数点出土しているのみであり、以下で紹介する遺構のいくつかは、この時期に位置づけられる可能性がある。この面において土坑５基、溝１条、道路状遺構１条、柵列３基、小穴24基を検出した。性格不明の遺構も多いが、炭焼窯と考えられる土坑や、地境や区画を目的とした可能性のある溝、柵列などが含まれている。集落から離れた村山内での生業を知る上で、重要な遺構群と考えている。調査面積は約7789㎡である。

28号土坑（第32図、図版９）

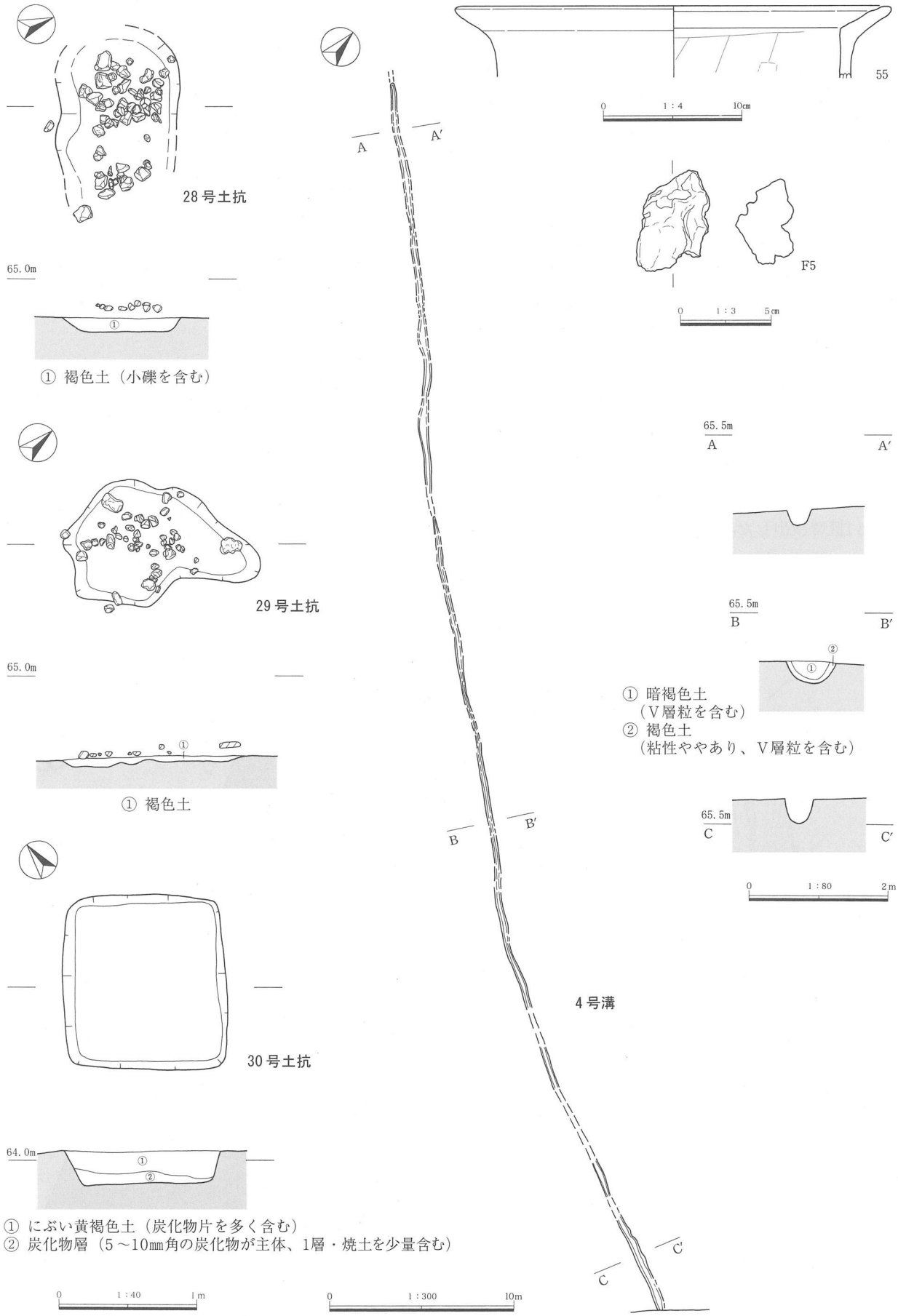
J10区で検出した。トレンチにより東西端を切ったため平面形態は不明。検出は第２遺構面覆土の土色がベースとなるⅡ層と似ており、明確な掘り込み面を確認できず、Ⅱ層中での検出である。覆土中に安山岩の礫を多く含む。遺物は出土していない。

29号土坑（第32図、図版９）

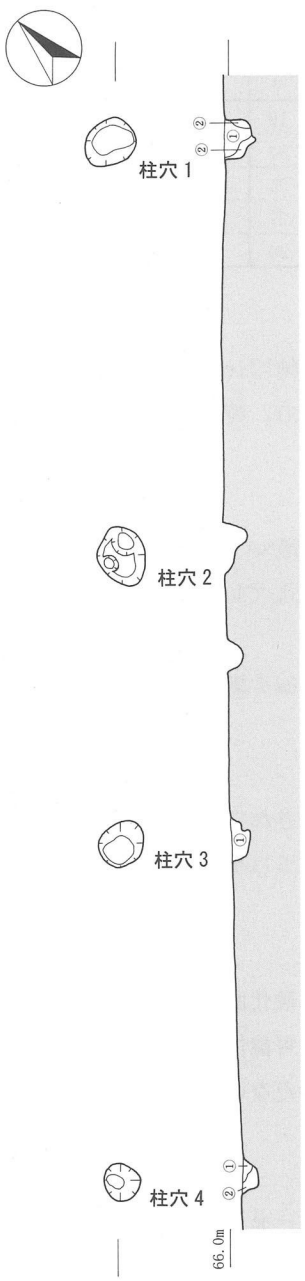
K11区で検出した。平面形態は不整形で、長軸145㎝、短軸91㎝を測る。覆土の土色がベースとなるⅡ層と似ており、明確な掘り込み面を確認できず、第３遺構面での検出である。27号土坑と同様、覆土中に安山岩の礫を多く含む。須恵器甕細片が出土している。



第31図　近世遺構分布図

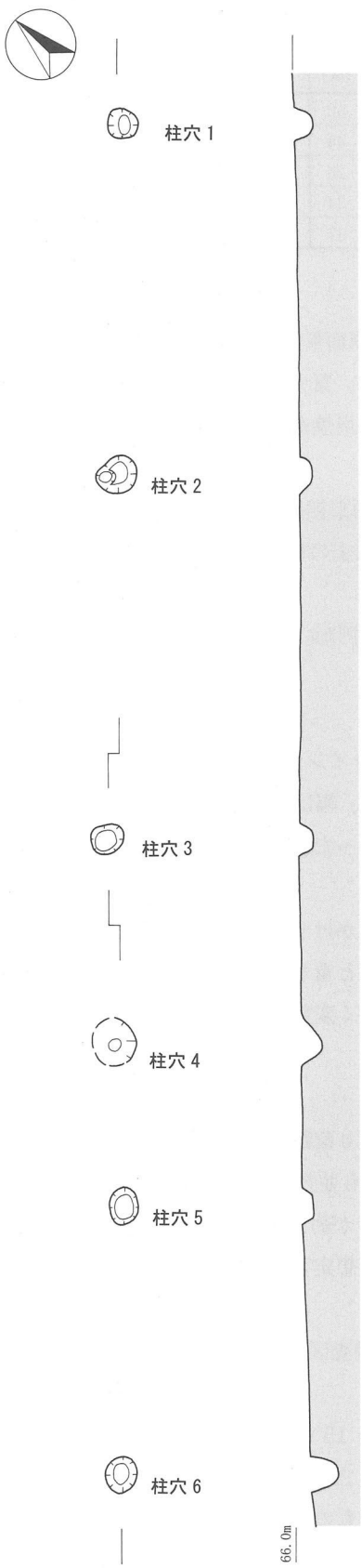


第32図　28～30号土坑・4号溝および出土遺物

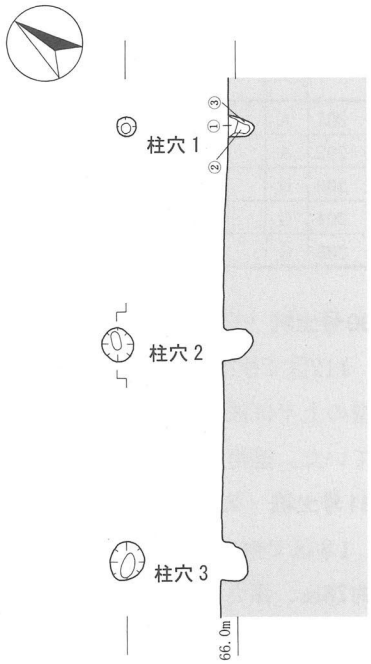


1号柵列

柱穴1
① 黒褐色土
（明黄褐色土ブロックを含む）
② 褐色砂質土
（明黄褐色土ブロックを含む）
柱穴3
① 暗褐色砂質土
柱穴4
① にぶい黄褐色土
② 暗褐色砂質土



2号柵列



3号柵列

柱穴1
① 灰黄褐色砂質土
② オリーブ褐色土
（明黄褐色粘質土ブロックを含む）
③ 暗灰黄色土
（にぶい黄褐色土との混土）

0　1:80　2m

第33図　1～3号柵列

第4表　小穴観察表（2）　※凡例５参照

No.	主	抜	柱	深さ(cm)	No.	主	抜	柱	深さ(cm)	No.	主	抜	柱	深さ(cm)	No.	主	抜	柱	深さ(cm)	No.	主	抜	柱	深さ(cm)
201	A			39	206	A			52	211	D			42	216	G			19	221	G			15
202	A			29	207	A			44	212	G			39	217	A			37	222	B		C	28
203	D			40	208	D			26	213	G			41	218	G			21	223	G			28
204	G			31	209	D			34	214	D			28	219	G			27	224				46
205	G			35	210	I			37	215	G			19	220	G			20					

30号土坑（第32図、図版９）

J12区で検出した。平面形態は方形、断面形態は箱掘り状を呈する。長軸131㎝、短軸121㎝、深さ27㎝を測る。壁の上半は被熱しており焼土化している。覆土は２層に分層できた。上下共に炭を含む。特に下層は炭が充満していた。遺物は出土していない。小型の炭焼窯と考える。

31号土坑（第32図、図版９）

I８区で検出した。４号溝を切る。平面形態は不整円形を呈し、底面には小型の凹部がいくつか見られる。直径約78㎝、深さ約８㎝を測る。覆土は褐色土の単層で、炭化物を多く含む。遺物は出土していない。

32号土坑（第31図）

G７区で検出した。平面形態は不整楕円形。長軸約130㎝、短軸約68㎝、深さ約27㎝を測る。覆土は、暗褐色土の単層。遺物は出土していない。

4号溝（第32図、図版８）

調査区中央やや南側で検出した。10ライン付近で約12°北に屈曲する。北西は削平されており、南東は調査区外へと延びる。断面形態はU字状を呈し、幅は平均で30㎝を測る。55は土師器甕。Ｆ５は椀型鍛冶滓（含鉄）である。この他、須恵器甕や土師器杯といった古代の土器が出土している。

道路状遺構（第31図、図版９）

調査区南東の斜面部から傾斜変換点にかけて検出した。北西から南東方向に延びる硬化面である。南東側は不明確となり。検出できなかった。３号溝と重なる部分が多く、この溝を踏襲している可能性がある。幅は平均約120㎝を測る。硬化面直下の土はやや暗く変色してはいたものの、明確な掘り方を持たない。道として使用される内、硬化・変色したと考えている。

1～3号柵列（第33図、図版９）

調査区南東平坦部で検出した。抜き取り痕跡を有し、覆土が近似する小穴が直線的に並んでおり、柵列と判断した。真北から西に約33°傾き、３本とも並行関係にある。柱穴は円形あるいは不整円形で、直径約10～27㎝、深さ約７～17㎝を測る。柱間間隔は１号が約158～207㎝、２号が約150～210㎝、３号が約114～122㎝を測る。柱穴規模から、簡易な柵であったことが想定される。

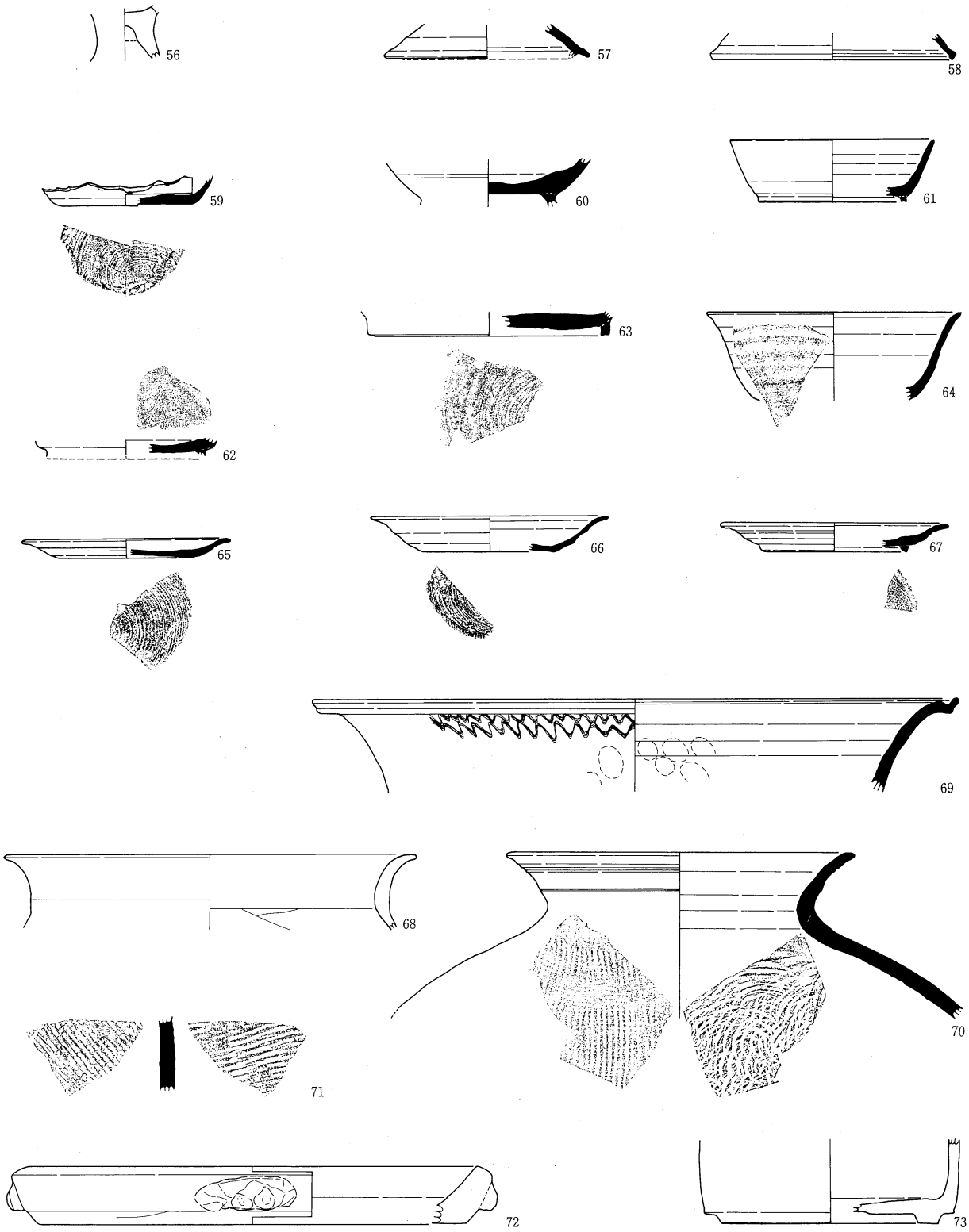
小穴群（第31図、第４表）

24基の小穴を検出している。全て、調査区東端の平坦部に位置する。このうちいくつかには柱痕跡が確認された。遺物は出土していない。

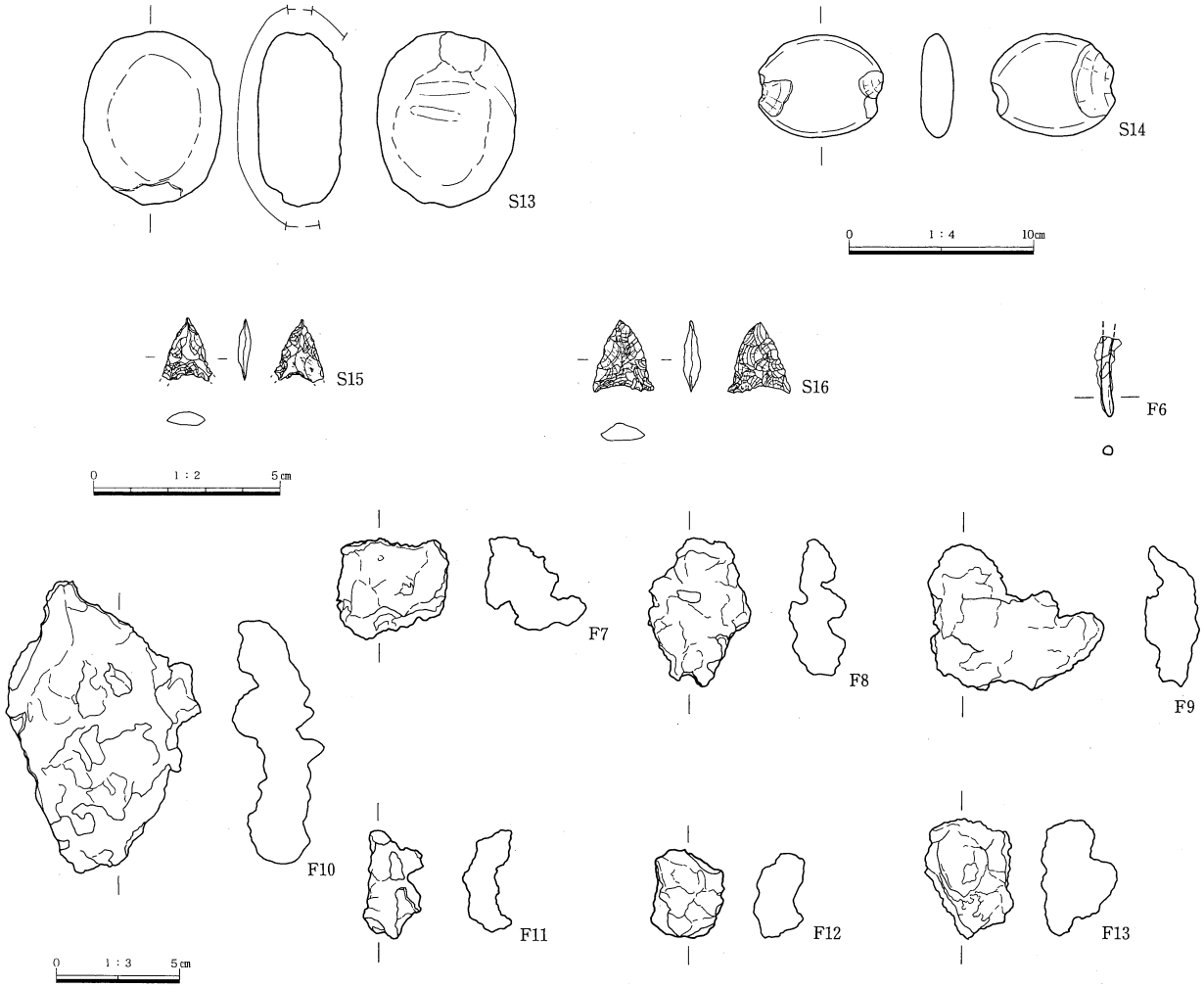
遺構外出土遺物（第34・35図、図版14・15・16）

表土や耕作土、攪乱から、縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代、近世に属する多くの遺物が出土している。図化可能な遺物の中から、重要性の高いものを中心に紹介したい。

56は古墳時代の土師器で、高杯の脚部。57は、須恵器杯蓋。７世紀中葉～後葉（陰田７～８期）に位置付けられる。58は須恵器蓋で、その形態と重ね焼き痕が確認できないことから、高広遺跡ⅣB期（８世紀末～９世紀前葉）に位置付けられる。59は底部回転糸切の須恵器杯。口縁部の割れ口外面側に、打点と考えられる細かい欠けが複数確認できた。故意に打ち欠いた可能性がある。60は須恵器有台壷で、高広遺跡ⅢB期（７世紀末～８世紀前葉）に類例が求められる。61は須恵器有台杯で、高広遺跡ⅣB期（８世紀末～９世紀前半）に位置付けられ



第34図　遺構外出土遺物（1）



第35図　遺構外出土遺物（2）

る。62は須恵器有台杯で、底部内面にヘラ記号「×」が確認できる。63は高広遺跡Ⅳ期（８世紀中葉～９世紀前半）の可能性がある須恵器有台皿。64～67は９世紀末～10世紀初頭の須恵器供膳具。64は須恵器椀である。口縁部外面に焼成前の線刻が認められる。施釉陶器模倣と考えられる形態から、９世紀末以降と推定できる。灰色を呈し堅緻に焼成されており、９世紀末からあまり下らない時期を想定しておきたい。65～67は皿で、古曽志平廻田３号窯（10世紀前後）に位置付けられよう。65は内面が強く摩耗しており、転用硯と考えている。68は土師器甕。69～71は須恵器甕。71内面には、同心円状の当て具痕の上から格子目叩きが施されている。内面からの叩き出しを行う際に外面同様の叩き具を使用したものと考える。須恵器製作工程を考える上で、貴重な資料と言えよう。72・73ともに近世後期の遺物である。72は土師質の焙烙。口縁部外面に耳が付き、底部外面には剥離剤の砂が大量に付着する。73は肥前系陶器鉢。高台畳み付き部分は、釉拭き取りされる。18世紀以降と推定する。

Ｓ13～16は石製品で、縄文時代のものと推定する。Ｓ13は安山岩製の磨石で、敲打痕がある。Ｓ14は安山岩製の打欠石錘。Ｓ15・16は石鏃で、前者は黒曜石、後者はサヌカイト製。

Ｆ６～13は鉄関連遺物である。Ｆ６は鉄製品で、釘と推定される。Ｆ８～９・13は椀型鍛冶滓。Ｆ11・12は鍛冶滓である。含鉄鉄滓はＦ12・13である。

第５節　特論

第5表　鉄関連遺物分析資料観察表　資料番号１　※凡例7参照

出土状況	遺跡名	名和衣装谷遺跡		遺物No.	F 7			分析	項目	滓	メタル
	出土位置	表土		時期:根拠					マクロ		
試料記号	検鏡:NIT-1	法量	長径　4.3㎝	色調	濃茶褐色	遺存度	破片		検鏡	○	
									硬度	○	
					黒褐色	破面数	5		CMA		
	化学:NIT-1		短径　4.0㎝						X線回析		
				磁着度	3	前含浸	－		化学	○	
	放射化:－		厚さ　4.5㎝						耐火度		
				メタル度	なし	断面樹脂	－		カロリー		
遺物種類（名称）	椀形鍛冶滓（中)？		重量　71.5g						放射化		
									X線透過		
観察所見	平面、不整台形をした椀形鍛冶滓の側部寄りの破片と推定される。通常の椀形鍛冶滓に比べて側部や表面の滓質に幅があり内部にも２㎝を超える木炭片や木炭痕をもっている。上面と右手から手前側の側面を除いては破面で、不規則な凹凸の表面にとびとびに残る破面を追いかけていくと、少なくとも５面が数えられる。上面は緩やかな皿状をした窪みで、わずかに木炭痕らしき部分も残されている。生きている側面は流動状の部分や半溶解の部分、さらにはガサガサした滓表皮と、まったく一定しない表面状態である。下面はＶ字状に突出し、手前よりは黒褐色の流動状、上手側は数㎝大の灰色に被熱した鍛冶炉の炉床土をかみこんでいる。破面部にはさまざまな質感をもつヒダ状の滓部や木炭痕による中空部とが混在する。気孔には粗密があり、左側肩部の表層は青黒い光沢をもった緻密な滓である。色調は表面が酸化土砂のため濃茶褐色で、地は全般的には黒褐色である。											
分析部分	長軸端部１/２を直線状に切断し、滓部を分析に用いる。残部返却。										
備　考	一見、製錬炉の炉内滓のような、木炭痕の目立つ滓質のばらばらな資料である。例外的には鍛冶処理が不調だと本資料のような椀形鍛冶滓が生ずることもあり、外観的には鍛冶滓の可能性が高いものとみておく。										

第6表　鉄関連遺物分析資料観察表　資料番号２

出土状況	遺跡名	名和衣装谷遺跡		遺物No.	F10			分析	項目	滓	メタル
	出土位置	F７ カクラン		時期:根拠					マクロ		
試料記号	検鏡:NIT-2	法量	長径　7.9㎝	色調	濃暗褐色	遺存度	破片		検鏡	○	
									硬度	○	
					黒褐色	破面数	7		CMA		
	化学:NIT-2		短径 11.6㎝						X線回析		
				磁着度	4	前含浸	－		化学	○	
	放射化:－		厚さ　3.5㎝						耐火度		
				メタル度	なし	断面樹脂	－		カロリー		
遺物種類（名称）	椀形鍛冶滓（中）		重量 270.0g						放射化		
									X線透過		
観察所見	平面、不整楕円形をしたやや薄手の、椀形鍛冶滓の肩部寄りの破片である。上下面と右側部のうちの上手側は生きており、破面数は７を数える。上面は特徴的な外観を示している。左側は緩やかな波状の一段低い滓部でやや流動状である。右半分の外周寄りは１㎝大前後の木炭痕が目立つ。わずかに高い滓部で、肩部に沿って帯状にのびている。こうした左右の差は羽口先側と羽口先から遠い側の差である。側面から肩部は緩やかな皿状で、右側面の手前半分では二段椀形滓となっている。滓質は上下とも差異は認められない。下面は１㎝大前後の木炭痕が密集し、かつ、激しい表面観をもち、わずかに皿形である。右側の肩部直下の裏面には、1.5㎝大の羽口先の破片が脱落して発泡したと推定される破片をかみこんでいる。左手側面はやや緻密な滓部で、不規則な気孔がまばらに点在する。色調は表面が濃暗褐色で、地は黒褐色である。											
分析部分	長軸端部１/５を直線状に切断し、滓部を分析に用いる。残部返却。										
備　考	扁平ながら一部が二段椀形滓となっている。滓質に変化がみられなくて、滓層がそれぞれ1.5㎝前後と薄いことから、同一作業中での操業単位の重なりを示しているにすぎない可能性が高い。なお、構成資料の底面も、一般的に浅い皿形のものが多く、鍛冶炉の数がそう多くないことを反映しているのかもしれない。										

第7表　鉄関連遺物分析資料観察表　資料番号3

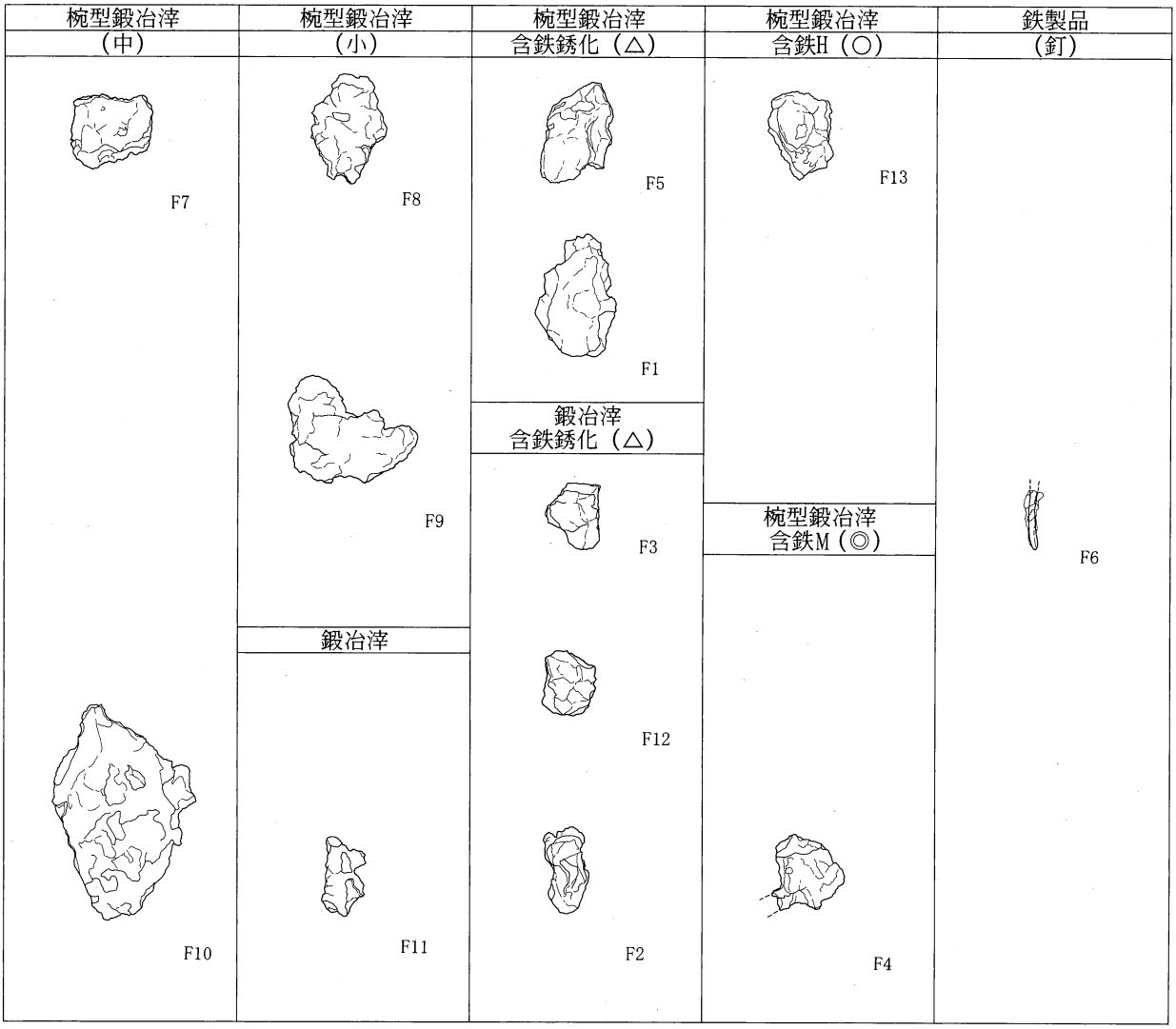
出土状況	遺跡名	名和衣装谷遺跡		遺物No.	F 9			分析	項目	滓	メタル
	出土位置	J11 カクラン		時期:根拠					マクロ		
試料記号	検鏡:NIT-3	法量	長径　6.8cm	色調	茶褐色	遺存度	ほぼ完形		検鏡	○	
									硬度	○	
					黒褐色	破面数	3		CMA		
	化学:NIT-3		短径　6.2cm						X線回析		
				磁着度	4	前含浸	－		化学	○	
	放射化:－		厚さ　2.4cm						耐火度		
				メタル度	なし	断面樹脂	－		カロリー		
遺物種類（名称）	椀形鍛冶滓（小）		重量　90.0g						放射化		
									X線透過		
観察所見	平面、不整多角形をしたやや発達の弱い薄手の椀形鍛冶滓である。上手側と上面は右方向へのびる突出部をもち、後者が上位で上にかぶるような状態である。上下面と側面の大半が生きており、小破面が側部や肩部に残されている。椀形滓といっても全体形状は三角形気味で左から右に向かい滓が発達しかけた状態である。破面数は３を数える。上面は薄い酸化土砂に覆われているものの半流動状で、右方向に向かいやや流動気味で形成された可能性が高い。左寄りがもっとも厚く、肥厚部は右方向にのびる浅い舟底状である。側面はやや出入りが多く、その一部は破面である。下面はやや樋状で酸化土砂の隙間から木炭痕が連続していることが読み取れる。色調は表面が酸化土砂により茶褐色で、地は黒褐色である。											
分析部分	長軸端部１/３を直線状に切断し、滓部を分析に用いる。残部返却。										
備　考	左寄りの肥厚部が磁着が強く、わずかに含鉄部があった可能性もある。いずれにしても発達の弱い椀形鍛冶滓で、鍛錬鍛冶滓の一種である可能性が濃厚である。										

第8表　鉄関連遺物分析資料観察表　資料番号4

出土状況	遺跡名	名和衣装谷遺跡		遺物No.	F13			分析	項目	滓	メタル
	出土位置	I9 カクラン		時期:根拠					マクロ		○
試料記号	検鏡:NIT-4	法量	長径　3.6cm	色調	茶褐色	遺存度	破片		検鏡		◎
									硬度	○	
					濃茶褐色	破面数	3？		CMA		
	化学:－		短径　4.9cm						X線回析		
				磁着度	4	前含浸	－		化学		
	放射化:－		厚さ　3.4cm						耐火度		
				メタル度	H(○)	断面樹脂	○		カロリー		
遺物種類（名称）	椀形鍛冶滓（含鉄）		重量　50.5g						放射化		
									X線透過		○
観察所見	平面、不整五角形をした含鉄の椀形鍛冶滓の破片である。付着土砂が多く不明な点も多いが現状を記録しておく。上面はほぼ平坦で、側面肩部は不規則な破面である。下面は部分的に突出している。破面数は少なくとも３面を数えられるが、さらに多い可能性もある。上下面や側面にも木炭痕が点在し、錆膨れや放射割れも発達しかけている。下面は突出部を除けばごくゆるやかな皿状で、1.8cm程度の厚さの薄手の椀形鍛冶滓の中核部から側部寄りの破片と推定される。色調は表面が酸化土砂により茶褐色で、錆のにじむ部分では濃茶褐色、地も濃茶褐色である。磁着は上面寄りがもっとも強い。											
分析部分	短軸端部１/２を直線状に切断し、メタル部を中心に分析に用いる。断面樹脂塗布。残部返却。										
備　考	分析資料No.５とは含鉄部の大きさが違うが、似た条件の資料である。精錬鍛冶滓の一種であろうか。本遺跡では構成された13点の遺物のうち、６点～７点と、半数近い資料が含鉄の滓であるという特色をもつ。遺跡の性格を指し示す可能性が大である。										

第9表　鉄関連遺物分析資料観察表　資料番号5

出土状況	遺跡名	名和衣装谷遺跡		遺物No.	F 4			分析	項目	滓	メタル
	出土位置	I8 Ⅱ層		時期:根拠	平安:包含層出土資料				マクロ		○
試料記号	検鏡:NIT-5	法量	長径　4.0cm	色調	茶褐色	遺存度	破片		検鏡		◎
									硬度	○	
					濃茶褐色	破面数	1？		CMA	○	
	化学:－		短径　4.1cm						X線回析		
				磁着度	7	前含浸	－		化学		
	放射化:－		厚さ　2.5cm						耐火度		
				メタル度	M(◎)	断面樹脂	○		カロリー		
遺物種類（名称）	椀形鍛冶滓（含鉄）		重量　51.5g						放射化		
									X線透過		○
観察所見	平面、不整六角形をした含鉄の椀形鍛冶滓の破片と推定される資料である。表面の酸化土砂が強く、表面状態が極めてわかりにくい。上下面が平坦気味で、断面形は1.8cm程度の厚みをもつ板状である。側面が急角度で立ち上がる部分が多く、凹部は木炭痕と考えられるが、破面も含まれている可能性が高い。現状では左側面を破面とみて、破面数は１としておく。それぞれの側端部の突出部からは錆膨れの欠けがそれぞれ見られてその周辺部では放射割れも入りはじめている。磁着度は７と本遺跡では最大値を示す。色調は表面の酸化土砂が茶褐色で、地は濃茶褐色である。										
分析部分	長軸端部１/２を直線状に切断し、メタル部を中心に分析に用いる。断面樹脂塗布。残部返却。										
備　考	含鉄部が体積の１/２以上と推定される。含鉄鉄滓あるいは鉄塊系遺物とすべき資料かもしれないが、上下面が面をもち、厚みも薄手の椀形鍛冶滓と近似しているという条件や、分析資料No.４との類似点から、含鉄の椀形鍛冶滓としている。精錬鍛冶段階の製錬系の鉄情報を残す可能性のある資料として注目しておきたい。										



第36図　名和衣装谷遺跡鉄関連遺物構成図

第10表　鉄滓表

※凡例７参照

挿図番号	遺物番号	遺物種類（名称）	地区	層位遺構	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	磁着度	メタル度	特徴
22	F１	椀形鍛冶滓（含鉄）	I8	17号土坑	4.1	6.6	3.7	128.0	5	錆化(△)	放射割れと黒錆のにじみが目立つ典型的な含鉄の椀形鍛冶滓。左側部と手前側が破面。上手の下半部にはサビ膨れの欠け。錆化しているが本来の鉄部の範囲が広く、構成図№11･12などと近似。
	F２	鍛冶滓（含鉄）	I8	17号土坑	2.3	4.7	3.9	37.2	4	錆化(△)	やや厚手の側面に大型の木炭痕をもつ鍛冶滓片。上下面と側部の一部が生きる。右側部に斜め下に伸びるくぼみは樋状で長さ3.8㎝、幅1.4㎝強を測る。鍛冶具痕の可能性あり。
30	F３	鍛冶滓（含鉄）	J11	Ⅱ層	3.1	3.8	2.7	26.0	3	錆化(△)	含鉄の椀形鍛冶滓端部片。上下面と右側部が生きる。手前側側部に突出する含鉄部は板状で長さ3.2㎝、幅1.5㎝強、厚さ３～４㎜である。鉄塊か鉄器片か不明。
	F４	椀形鍛冶滓（含鉄）	I8	Ⅱ層	4.0	4.1	2.5	51.5	7	M(◎)	第９表 鉄関連遺物分析資料観察表 資料番号５ 参照
32	F５	椀形鍛冶滓（含鉄）	I8	４号溝	4.1	5.2	3.6	66.5	4	錆化(△)	やや厚みをもった小振りの椀形鍛冶滓の側部破片。上下で質感が異なり下半部はきれいな椀形の滓。上半部にのる滓はゴツゴツした顆粒状で最上部に浅い樋状の含鉄部がのる。丸ノミなどの刃先の脱落物かもしれない。下半の滓部は粗い気孔が点在。
35	F６	鉄製品（釘）	H10	表土	3.3	1.0	0.7	2.3	3	錆化(△)	横断面形がやや台形の小型の鉄釘の足部破片。頭部は欠落。外周部には酸化土砂か小さなコブ状。
	F７	椀形鍛冶滓（中）?		表土	4.3	4.0	4.5	71.5	3	なし	第５表 鉄関連遺物分析資料観察表 資料番号１ 参照
	F８	椀形鍛冶滓（小）	I11	表土	4.2	5.3	2.3	54.0	3	なし	扁平な椀形鍛冶滓の中核部から側部にかけての破片。上下面や側面とも木炭痕が激しく、クリーニング時の光沢を持つ。右側面が破面。密度はやや高め。
	F９	椀形鍛冶滓（小）	J11	カクラン	6.8	6.2	2.4	90.0	4	なし	第７表 鉄関連遺物分析資料観察表 資料番号３ 参照
	F10	椀形鍛冶滓（中）	F7	カクラン	7.9	11.6	3.5	270.0	4	なし	第６表 鉄関連遺物分析資料観察表 資料番号２ 参照
	F11	鍛冶滓	H11	カクラン	2.2	4.3	2.0	16.2	3	なし	小型の椀形鍛冶滓の側部破片。左側が破面。短軸方向に馬背状に盛り上がり、下面もそれに対応する特異な形状。発達の弱い椀形鍛冶滓の特色を持つ。
	F12	鍛冶滓（含鉄）	I10	カクラン	3.2	3.7	2.1	34.2	4	錆化(△)	滓主体の外観を持つ椀形鍛冶滓片。上下面と側部の一部が生きいずれも大きな波状を示す。一部は木炭痕。見かけのわりには磁着が強い。
	F13	椀形鍛冶滓（含鉄）	I9	カクラン	3.6	4.9	3.4	50.5	4	H(○)	第８表 鉄関連遺物分析資料観察表 資料番号４ 参照